

F83-Tu5-9ウ



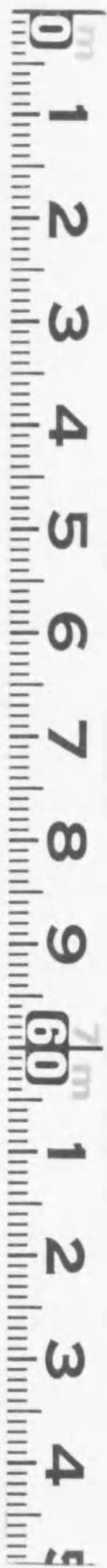
1200500765442

593
5

プウニンとバブリン

トルゲエニエフ作
小沼達譯

岩波書店

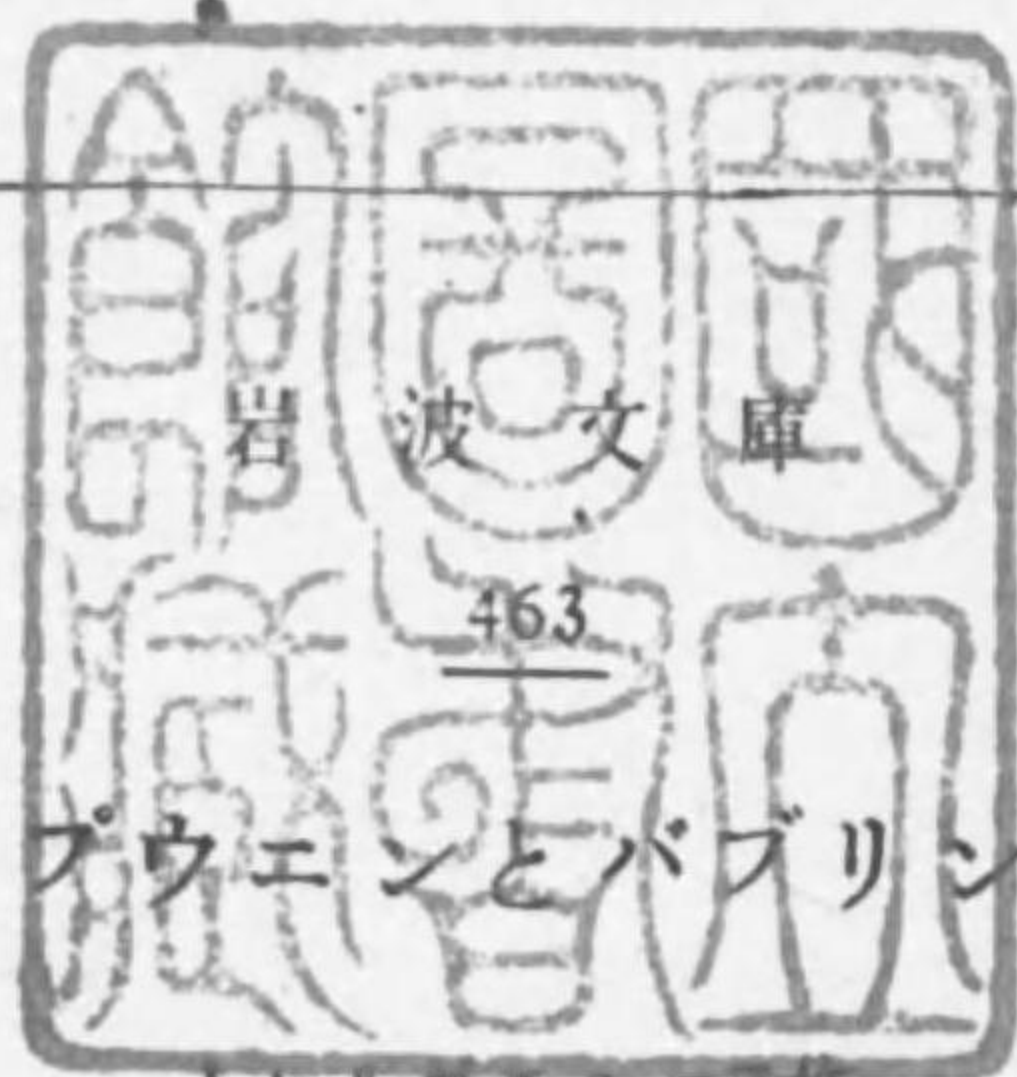


始



F83

T05-9



トウルクエーエノ作
小沼達譯



岩波書店



自分は、年寄りて身體の具合もよくない。自分の心は今たゞ日ごとに近づいて来る死を
思ふばかりである。過ぎ去つた年月を思ふ事もない、心の眼を後にふりむける事もないのである。
冬ならば燃えさかる爐の前に身動きもせず坐つて居る時、夏ならば蔭の多い並木道
を心靜かに遊歩し、自分ははつきりと今は遠く過ぎ去つてしまつた年月を、出來事を、人々の面
影を思ひ出す。さう云ふ時自分の心をひきとめるのは壯年時代の事でもなければ青年の時代
の事でもない、自分はいつも自分のほんの幼年の時代、少年時代の極初期にまでひきもとされるの
が、自分は自分の物語をしつかりと順序を立て、話して見よう。

1

— 一八三〇年 —

3
老僕のフィリップアイチがはいつて來た。いつものとほり、薔薇型に結んだ襟飾をつけて、「臭い息
の匂はないやうに」しつかりと唇を閉ちて、灰色の捲毛を額の眞中に垂らして、爪先で歩いて來
た。部屋にはいると、彼は低く頭を下げて、紋章の封印を施した一通の大きな手紙を鐵製の皿にの

せて私の祖母に差し出した。祖母は眼鏡を掛けて手紙に眼を通した……

「此處に来て居るのかえ。」彼女は訊ねた。

「奥様は何を仰せられ……」フィリップイチはおどろきながら云つた。

「わからない人だねえ。此手紙を持つて来た人は——今其處に居るのかえ。」

「はい、其處に、其處に……會計の方に居られます。」

祖母は手に持った琥珀の數珠を鳴らした。「では此處に来るやうに云ひなさい……それからお前、お前さんは、」祖母は私の方に向きなほつた。「ちつとして居るのですか。」

私は私の爲にあてがはれた隅の腰掛に坐つたまま、身動き一つしなかつた。

祖母の躰け方は針のやうにきびしいものであつた。

五分ほど間をおいて、髪は黒い、皮膚も黝すんだ、頬骨の潤い、顔中に痘瘡の痕のある、鉤鼻の、眉の濃い三十五六の男が部屋の中に這入つて来た。その太い眉の下からは小さな灰色の眼が静かに、物悲しげに覗いて居た。その眼の色と表情とは一體に東洋的なその顔立ちにはひどく似つかはしくないものであつた。きちんとした、裾の長いフロックを着て居た。そして扉口に立止ると——たゞ頭だけをさげて挨拶した。

「お前さんがバブリンと云ひなさるんだね」祖母は訊ねた、そして獨り言のやうにつけくはへた。

「Il a l'air d'un arménien.」(人のやうだ。)

「左様で御座います。」その男は太い、落着いた聲、答へた。「お前さん」と云ふ祖母の最初の言葉がひどい時、男の眉はかすかにふるへた。彼は私の祖母が同等の人に對する場合のやうに「貴方」とても云ひ掛けるものと思つて居たのか。

「お前さんは露西亞人かね。正教ですね。」

「左様で御座います。」

祖母は眼鏡を外して、頭の端から足の先までじろ／＼とバブリンを眺めまはした。が、彼は眼を落さうともしなかつた、たゞ兩手を背後に組み合せたゞけであつた。けれどとりわけ私の心をおどろかしたものは彼の髯であつた。それはすべ／＼と剃刀が當てゝあつた。が、さう云ふ青い頬や額は私は生れ落ちてからまだ一度も見事な事なかつた。

「ヤーコフ・ペトロロキッチが、」祖母は云ひはじめた。「此手紙でお前さんの事を『お酒を飲まない』、仕事に精を出す人だと云つて賞めて寄越してゐるんですがね、しかし、それならば、お前さん、何故彼處を罷めなかつた。」

「あの方は地所の管理人としては私とは違つた種類の人間がお入用なんです、奥さん。」

「違つた……種類の？ 私にはどうも解りかねるやうですが、」祖母は再び數珠を鳴らした。「ヤーコフ・ペトロロキッチはお前さんには風變りな所が二つあると書いてよこしてありますが、風變りな所と云ふとどう云ふのですか。」バブリンはわづかに肩を聳やかした。

「何を風變りと云はれたのですかよくわかりませんが、多分、私が……體刑を許さない點を云はれ

たのかと思ひます。」

祖母は驚ろいた。「ではヤーコフ・ペトローヴィッチはお前さんを殴らうとしたと云ふんですかい。」

バブリンの浅黒い顔は髪の毛の根まで赭くなつた。「さう云ふ意味では御座いません、奥さん。私は……農夫共に對して、體刑を用ひない事を規則と致して居りましたのです。」

祖母の驚きは前よりも大きかつた。彼女は両手を上にあげて見せさへした。

「ほう」彼女はやつと口を開いた。そしてやゝ首をかしげてもう一度しげ／＼とバブリンの容子をながめた。「それがお前さんの規則ですかい。が、そんな事はどうでも構ひません、私の入用なのは監理人ぢやなくて、會計方の書記が欲しいのだから。お前さん、筆蹟はどうですかい。」

「筆蹟は綴りを間違へずに上手に書けます。」

「それも私にはどうでもいゝのですよ。たゞあの厭らしい、尻尾のある新らしい大文字を使はずにはつきりと書いてくれゝばそれで結構です。それからお前さんのもう一つの變つた點と云ふのは？」

バブリンは云ひ澁るやうに身を動かして咳をした。

「多分……あの方は私の一人でない事を云はれたのでせう。」

「お内儀さんがおありかい。」

「いゝえ……しかし……」

祖母は眉をひそめた。

「私と一緒に暮して居る者が一人あるのです……男です……友人、氣の毒な友人でして、ずっと一緒にやつて來て居るのです……もう十年にもなります。」

「親戚の方かね。」

「いゝえ、親戚ではありません——友人です。職務の妨げになるやうな事は決してありません。」

バブリンは抗議を豫想したかのやうに急いでつけくはへた。「其男は私と同じ部屋に住んで、私が喰はせて居ります。一かどの役には立ちさうに思はれるのですが……教育は十分にある男なので、最良で申すのでなく、全く教育は十分にあるのです。それに道徳は全く模範的のものでず。」

祖母は半ば眼を閉ちて唇を噛みながらバブリンの云ふ事をしまひまで聞いた。

「その人はお前さんのお金で暮してゐるんですね。」

「左様です。」

「慈善の爲に養うて居なさるのかね。」

「正義の爲にです……貧しい者を助けるのは貧しい者の義務ですから。」

「ほう、さうですかい。さう云ふ事は始めて聞きました。私は今迄それは何方かと云へばお金持の義務のやうに考へてましたよ。」

「金持にとつては、敢て申し上げれば、それは一種の事業です……けれど、私共のやうな者にとりましては……」

「宜しい、宜しい、もう澤山です。」祖母は相手の言葉をさへぎつた。そして一寸の間考へた後また鼻にかゝつた聲で云ひ出した。それは明かに彼女の不機嫌を示すものであつた。「で、お前さんのその厄介者は歳はいくつですかい。」

「私と同年です。」

「ほう、お前さんと……私はまたお前さんがその男を育て、居るのかと思つて居ましたよ。」

「さうではないのです。その男は私の友人です。それに……」

「もう澤山、」祖母はまた口をはさんだ。「お前さんは博愛家だと見える。ヤーコフ・ペトロヴィッチの云ふのは尤もです、お前さんの身分でさう云ふのは——これは成程風変わりだものね。しかしそのそろ用談にかゝりませう。私はこれからお前さんの仕事を説明して上げます。それから給金の話ですが……Que faites vous ici? (お前さん何をして居るのです?)」祖母は不意にその黄色く萎びた頬を私の方に向けて云つた。「Allez etudier votre devoir de mythologie.」(神話の宿題を勉強せよ。)

私は跳び上つて、祖母の手に接吻して、外に出た——神話を勉強する爲にではなく、たゞ庭に出て遊ぶ爲に。

祖母の邸の庭園は非常に古い、そして廣大なものであつた。一方は水の流れて居る池になつて居て、その池には鮒や柳鱒ばかりでなく、あの有名な、そして今は殆んど何處にも居なくなつてしまつた山女さへも居た。水落の所にはこんもりとした葡萄の茂みがあつて、それから上の方は丘の兩

面に榛や接骨木や忍冬や野茨がしげり、その根元は更に石南や獨活などにつままれて居た。所々灌木の間に小さな空地が透いて居て、其處には絹のやうな柔かい緑草の間に小さな菌が愉快げに淡紅や、紫や、朽葉色など色さま／＼の帽子をのぞかせて居たり、白屈菜の黄金色の球が明るく燃えて居たりした。春には此處で鶯が唄ひ、蜂が口笛を吹き、郭公が鳴く。夏の日盛りにも此處だけはいつも冷々して居る——私は此静な茂みに分け入るのが大好きであつた。そこには私だけしか知らない——少くとも私のさう想像して居た——大好きな秘密の場所がいくつもあるのだつた。祖母の部屋を出ると、私は眞直にさうした場所の一つ、自分でひそかに「瑞西」と名附けて居た地點の方に歩いて行つた。が私の驚きはどんなだつたらう、未だ「瑞西」に行き着かない前に自分が半ば枯れた小枝や緑の枝葉の厚く重なり合つた間を透して自分以外の誰かゝもう其處に居るのを發見したとき！ 黄色い粗羅紗の百姓外套を着て丈の高い帽子をかぶつたひよろ／＼と細長い姿が其頃私の何よりも愛して居たその場所に立つて居るのであつた。私は足音を忍ばせて傍に近寄つた、そして自分の全く見知らぬ顔、矢張り妙に細長くて柔かい、小さな赤味を帯びた眼とひどく可笑しい鼻をした顔をとめえた。その鼻はまるで豆の莢のやうに長々とのびて殆んどふつくりとふくれた唇の上に垂れかゝつて居るのだつた。その唇は時々かすかに顫へて丸くすぼまりながら、細い、鋭い口笛を洩らして居た。同時に胸の上部に向ひ合つて上げられた骨つばい、長い兩手の指も急速な廻轉運動をなして動いて居るのであつた。私は二足三足近づいて、なほもしみ／＼とその男の容子に見入つた……此見知らぬ男は兩手に小さな浅い盃——カナリヤに挑みかけて唄はせる使ふやうな盃を

持つて居た。小枝が一つ私の足許で折れた。見知らぬ男ははつと身をすくめてぼんやりした兩眼を茂みの方に向けると、そのまゝたじ／＼と後退らうとした……が、彼は後の立木にぶつかつた。そしてかすかな叫び聲をあげて立止つた。

私は茂みの蔭を出た。見知らぬ男は向うから微笑みかけた。

「今日は、私は云つた。」

「今日は、坊ちゃん！」

私は彼が私の事を坊ちゃんと呼んだのが氣に喰はなかつた。何と云ふ慣れ／＼しきなのだ！

「あんた、此處で何をしてたんです。」私はきびしく訊ねかけた。

「まあ、見て、御覽なさい、彼は相變らずにこゝ／＼したまゝで答へた。「私は小鳥に唄を唄はせて居るんです。彼は私に例の小さな盃を見せた。「鶺鴒がそりや素敵な聲で唄ひかへしますよ。あんた方の年頃なら屹度此羽の生えた歌唄ひの調べが面白いにちがひない。まあ、一寸聽いて御覽なさい。私が歌を唄つて見せます——彼奴等は直ぐに返事をしますよ。ほら、實に愉快ぢやありませんか。」

彼は手に持つた盃をこすり合せはじめた。直に一羽の鶺鴒が七竈セツカの上からそれに答へて唄ひ出した。見知らぬ男は聲を立てずに笑つてそつと私に目配せして見せた。

此笑ひや目配せ——そればかりでなくその弱い、舌たるい聲、曲つた膝や瘦せこけた手から帽子や長い百姓外套ハヤシに到るまで——此見知らぬ男のあらゆる動作には悉く人の好い、罪のない、そして

何かしら滑稽なものが含まれて居た。

「あんた、ずつと此處に居たの？」私は訊ねた。

「いゝえ、今日來たばかりです。」

「ぢや、あんたはあの人云つてた……」

「バブリン君が奥さんにお話した人？ さうです、それが私です。」

「あんたのお友達はバブリンで云ふの？ で、あんたは？」

「私はプウニン。プウニンと云ふのが私の名です。プウニン。あの方はバブリン、私はプウニンです。」彼はまた盃を鳴らしはじめた。「お聽きなさい、お聽きなさい、ほら、あの鶺鴒を……何と云ふ聲でせう！」

私には此奇妙な人が急に「恐しく」氣にいつてしまつた。ほとんどすべての子供と同じく私も知らない人間に對してはたゞおづ／＼して居るか、尊大にかまへて居るかどちらかであつた。が、此人はどうしたのかまるで十年も前から知り合つて居るやうな氣がしてならなかつた。

「一緒に行きませう。」私は云つた。「僕、此處よりもずつといゝ所を知つて居るんです。ベンチもあります。其處に坐ると向うの堤も見えます。」

「えゝ、行きませう。」私の新しい友達トモは唄をうたふやうな聲で答へた。私は彼を先に立てた。彼は絶えず／＼と左右の足をたゞよはせながら、時々がつくりと頭を後に投げ上げた。

私は彼の外套の背の襟の下に小さな總カサのさがつて居るのを見つけた。「そこに下つて居るのはな

に？」私はたづねた。

「何處に？」彼は訊ねかへしながら片手を襟の所にやつて見た。「あゝ、此總まじてすか。なに、これはかうしとけばいゝんごすよ。飾りに縫ひつけたものでせう。邪魔にはなりませんよ。」

私は彼をベンチに連れて行つて腰を下した。彼も私と並んで坐つた。「こりやいゝ所だ。」彼は呟いて、深く／＼溜息を吐いた。「おゝ、何ていゝんだらう。あなたは全く素晴らしい庭園を持つてゐるんですねえ。おゝ、おゝ。」

私は横目に彼の容子を眺めた。「あなたは随分變へんな帽子を被つてゐるんですね。」私は思はずさう叫ばずには居られなかつた。「一寸見せて下さい。」

「さあ、どうぞ御覽なさい、坊ちゃん。」彼は帽子を取つた。私は手をのばしかけたが、ふと眼をあげると——思はず吹き出してしまつた。ブウニンの頭はすつかり禿かぶげて居るのだつた。すべ／＼した眞白な皮膚に蔽はれた高く尖つた頭には全く一筋の毛も見えなかつた。

彼は掌でそれを一撫なでして一緒に笑ひ出した。笑ふ時彼はまるで噴はなせて居るやうに見えた、口を大きく開いて眼をつぶつてしまふのである——額には堅緻が三筋、まるで浪のやうに下から上へ走つた。「どうです、彼はやつと云つた。『まるで鶏卵たまごのやうでせう？』」

「えゝ、えゝ、鶏卵たまごそつくりですよ！」私は夢中になつて云ひ加へた。「あなた、ずつと前からそんなになつてゐるの？」

「えゝ、随分前から。しかし以前は素晴らしい髪だつたんですよ。全くアルゴ船の人達が深い海を越

えて渡しに行つた黄金の羊毛のやうでしたよ。」

私はやつと十二歳だつた。が、神話を勉強して居たお蔭でアルゴ船の何であるかを知つて居た。が、私の何よりも驚いたのは此殆んど襤褸と云つてもいゝやうなものを着て居る人の口からさう云ふ言葉を聞いた事であつた。

「あなた、ちや、神話を習つたんですね、」私は手の中で彼の帽子をいぢりまはしながら訊ねた。その帽子は毛の脱け落ちた革で縁がとつてあり、厚紙を折返した扇をつけてその上に綿の詰物がしであつた。

「えゝ、私はその課目を研究しました、坊ちゃん。私はこれまでに何でも十分にやつて來たのです。しかしもうその冠り物を返して下さい、それは私の赤裸の頭を保護するものですからね。」

彼は帽子を目深く被つて白味がかつた眉をひそめながら、私が何者であるか、私の両親は何と云ふか、を訊ねた。

「僕は此處を持つてゐる人の孫です、」私は答へた。「僕はお祖母さんと二人つきりなんです。お父さんもお母さんも死んぢまつたんです。」

ブウニンは十字に切つた。「それはお氣の毒な事だ……では、あなたは孤兒こゑいなんですね、それに、相續人しやくじゆじんでもある。いや、貴族の血は直ぐわかります、それは眼の中にちゃんとあらはれる、そしてジジ、ジ、ジと鳴つて居ます。」彼は指先で血の鳴るさまを説明して見せた。「しかし——あなたは私の友達がお祖母さんと話をまとめたかどうか、約束の地位を贏ち得たかどうか、知りませんか。」

「僕、それは知らない。」

ブウニンは唖拂ひをした。「あゝ、たとへ暫くの間でもいい、此處に落着く事が出来たらなあ！さもなくて再び當てもない漂泊の旅をつとけて枕する場所もない身になるのだらう。人生の擾亂は止む時がない、靈魂は絶えず惑亂して……」

「ねえ、」私は彼の言葉をさへぎつた。「あんた、もと坊さんだつたの？」
ブウニンは私の方に向き直つて眉をひそめた。「あんたのさう訊ねられる原因は何ですか、坊ちゃん。」

「だつて、あんたは——あの、教會でお坊さん達がするやうな話し方をするんだもの。」

「私が教會語を使ふから、と云ふんですか？　が、驚く事はありません。普通の談話にはさう云ふ言葉は使はないけれど、一度我々の魂が燃え上れば——言葉もしたがつて同じやうに高潮される。これはあんたの先生も——露西亞文學の先生、あんたは先生に習つてゐるんでせう？——その先生もあんたに教へたてせう？」

「いゝえ、僕、教へられない、」私は答へた。「田舎に居る間は——僕、先生がいないんです。モスクワに行くとき澤山居るんだけど。」

「で、田舎には長く居るんですか。」

「二月、それつきりなの。お祖母さんが田舎に居ると駄目になつてしまふつて云ふんです。此處にも女の先生は居るんだけど。」

「佛蘭西人の先生？」

「えゝ、佛蘭西人の先生。」

ブウニンは耳の後を掻いた。「つまり、ママゼル、てわけですね。」

「えゝ、マドモアゼル・フリケエつて云ふんです。」私は其時自分が十二にもなりながら男の先生を持たないでまるで女の兒のやうに女の先生について居る事が急にはづかしくなつた。「でも、僕、ちつとも云ふ事なんか聞かないや、」私はさげすむやうな口調でつけくはへた。「聞いてなんかやるもんか。」

ブウニンは頭を振つた。「あゝ、貴族、貴族、君等は餘りに外國人を好き過ぎた、露西亞的なものには顔をそむけ——異國のものゝみに頭を垂れた、他郷のものゝみに心を向けた……」

「どうしたの、あんた、詩で話してゐるの？」私は訊ねた。
「さうお考へですか。えゝ、私には何時でもお望みの時にそれが出来ます。と云ふのは、むしろその方が私には自然なのです……」

が、丁度此時私達の後の園の中で高い鋭い口笛がひびいた。私の友人はそゝくさとベンチから立上つた。「さやうなら、坊ちゃん。あれは私の友達か私を呼んでゐるんです、探してゐるんです……あの人はどんな事を話すか……さやうなら、御免なさい……」

彼は茂みの蔭にかくれて見えなくなつてしまつた。私はひとりベンチに残つた。私は一種の不満と、同時に何かしら快よい、美しい感情を感じて居た……私はそれまで曾てブウニンのやうな人と

會つた事も話をした事もなかつた。私は次第に夢見心地になつて來た。が、神話の事を思ひ出して——ゆつくりと家の方に歸つて行つた。

家に歸つて私は祖母とバブリンとの間に話のまとまつた事を知つた。彼は召使達の居る方の棟の庭の庭にのぞんだ小さな部屋をあてがはれた。彼は直ぐに彼の友人と一緒に其處に落着いた。

恐新、茶を飲んでしまふと、私はフリケエ嬢の許しも請はずに、召使達の居る棟の方に出掛けて行つた。私はもう一度昨日のあの不思議な人と話をして見たかつたのだつた。扉を叩く事もせず——私共の家ではそんな習慣は行はれて居なかつた——私は眞直に部屋の中にはいつて行つた。が、其處で私の出會つたのは私の尋ねるブウニンではなく、却つて彼の保護者である——博愛家のバブリンであつた。彼は實際に立つて、上衣は脱いで兩脚を濡くはだけたまゝ長いタオルで熱心に頭と頸筋をこすつて居た。

「何御用ですか、」彼は手を下さうともせず眉をひそめたまゝで口を切つた。

「ブウニンは居ませんか、」私は帽も脱ぎ去らなすに極めて打解けた調子で訊ねた。

「ブウニン君、ニカインドル・ヴァキールイテは今不在です、」バブリンはゆつくりした聲で答へた。「が、一言御注意していただきます、若い衆。案内もどはずにさうして他人の部屋にはいつて來る事は決して立派な行ひではありません。」

私が——若い衆だつて！……何と云ふ無作法な言葉なのだ！……私は思はず憤怒に燃え上つた。

「あんたは僕が誰だか知らないんだ、」私は前の打解けた態度から急に高慢な調子にかはつて云ひ出した。「僕は此處の奥さんの孫ですからね。」

「誰であつても同じ事です、」バブリンは再びタオルを使ひにかゝりながら云ひかへした。「たとへ夫人のお孫さんであつても他人の部屋にはいる權利はありません。」

「他人の部屋だつて……何を云つてるんだ。此處は、何處だつて自分の家ぢやないか。」

「いゝえ、失禮だが、此處は——私の家です。此部屋は私の仕事に對して——私にあてがはれたものですから。」

「どうか他人に教へようとしなさい、」私は相手の言葉をさへぎつた。「そんな事、僕の方がずつとよく知つてるんだから。」

「いゝえ、教はらなければなりません、」今度は彼の方が私の言葉をさへぎつた。「それだけ大きくなつたらもうわかるでせう……私は自分の義務を知つて居ます、が、自分の權利も又よく知つて居ます。で、もし君があくまでもさう云ふ風に私に向つて來られるなら——私は君に此部屋から出て行つて貰はなければなりません。」

もし此時ブウニンがよろ／＼とよろめきなからはいつて來なかつたならば、私達の云ひ合ひは實際どんなになつて居たかわからない處だつた。彼は直に私達の顔附から何か不愉快な事の起きたのを推察したのだらう、忽ち此上ない喜びの色を浮べて私の方に近づいて來た。

「やあ、坊ちゃん、坊ちゃん、」彼は兩手を亂暴にふりまはして、例の通り音もなく笑ひながら叫

んだ。「君は私を訪問に来られたんですね。よく来て下さった、坊ちゃん！(どうしたと云ふのだ、私は考へた。此男は自分の事をもう君など、呼ぶのか。) さあ、行きませう、一緒に庭に行きませう。私は庭で妙なものを見つけましたよ……何故こんな暑苦しい所に居るんです。さあ、行きませう。」

私はブウニンのあとにしたがつたが、扉口の所でもう一度ふりかへつて挑みかけるやうな一瞥を相手に投げつける事を忘れはしなかつた——僕、貴様なんぞちつとも怖がつてやしないぞ……彼もまた同様にしてそれに答へた、タオルに向つて鼻を鳴らして見せさへした——恐らく自分がどの程度まで私を軽蔑して居るかを十分に見せつけようが爲に！

「あなたの友達は何て云ふ失敬な奴なんだらう、」私は自分の後で扉が閉るや否やブウニンに向つて云つた。

ブウニンは殆んど恐怖をでも感じたやうな容子でその膨れた顔を私の方に向けた。

「それは、一體、誰の事ですか、」彼は眼を丸くして訊ねかへした。

「誰つて、勿論彼奴の事さ……何て云つたつけ——あの、バプリンの事さ。」

「バラモーン・セミョーノキッチ？」

「うん、さう……あの、どす黒い奴。」

「え、え、え、」ブウニンは丁寧な中に非難の調子をこめて云ひかへした。「どうしてあなたはそんな事が云へるんですか、坊ちゃん——バラモーン・セミョーノキッチは厳格な主義を持つた最も尊

敬すべき人物です、並の人間ではないんですよ！ 二りや、あの人は自分に對するどんな無禮も許しはしません——自分自身の價値を知つてますからね、あの人間はそれは莫大な知識を持つて居るのです——こんな仕事をして居るべき人間ではないのです。あの人に對するには非常に丁寧にしたければなりません、あの人はねえ……」ブウニンは自分の口を私の耳許に持つて來た。「共和主義者なんですよ！」

私はブウニンの眼の中を見つめた。それは私には全く思ひがけない事であつた。カイダーノフの教科書やその他の歴史の本で私も既に古代の希臘や羅馬に共和民の存在して居た事は知つて居た。そしてどう云ふ理由からか彼等がいつも兜を冠つた、腕には圓い楯を持つて大きな足を露出しにした人達のやうに想像して居た。それを現在、此世で、しかも露西亞の片田舎で共和民に出會はうとは！……これはあらゆる私の理解を覆へし、全く滅茶々にそれを攪亂してしまつた。

「さうです、坊ちゃん、さうなんです、バラモーン・セミョーノキッチは共和主義者なんです、」ブウニンは繰返して云つた。「だから坊ちゃんも今後はあの人に對してどんな態度を取らなければならぬかわかつたでせう。が、もうお庭へ行きませう。まあ、私が彼處で何を見つけたか當てて御覽なさい。てりびたきの巢に郭公の卵があるんですよ、不思議ぢやありませんか！」

私はブウニンと一緒に庭に行つた、が、心の中では絶えず繰返して云つた、共和主義者、共和主義者……

「あゝ、さうだ、」私はやつと解つたやうな氣がした。「だから、あんな青い顔をして居るんだ！」

ブウニンとバプリンと——この二人の人物に對する私の態度は其日からつきりときまつてしまつた。バプリンは私の中に敵意を呼びおこした、が、幾日もたぬ中にその敵意には何かしら尊敬と云ふにも似たものがまじつて來た。私は彼を恐れた。私に對する以前のきびしさが全くなくなつてしまつた時すら私はなほ彼を恐れる氣持に打勝つ事が出来なかつた。勿論ブウニンの事は少しも恐れなかつた。私は彼を尊敬さへして居なかつた、むしろ、どちらかと云へば、一個の道化として取扱つて居た、が、私は全精神を以て彼を愛した。彼と一緒に何時間も過す事、彼と二人きりで居る事、彼の話を聞く事は——私にとつては此上ない喜びとなつた。祖母は勿論かうした「平民階級」——*du commun* の人間との *intimite* (親交) を喜ばなかつた、が、私は祖母の傍を離れる機會がありさへすれば、すぐに此滑稽な、大切な、不思議な友達の所にとんで行つた。マドモアゼル・フリケエが丁度その頃訪ねて來た或陸軍の中尉に私達の家庭に漲つてゐる退屈な空氣について愚痴をこぼしたと云ふ理由で祖母の爲めにモスクワに追ひかへされてからは、私達の會合は一層頻繁なものになつた。ブウニンの方でもまた十二歳の少年といくらでも話をしつゞける事を厭はなかつた。むしろ彼の方からそれをもとめて居るやうに見えた。そして私はいかに多くの物語に聞き耽つた事だらう——香ばしい樹蔭の乾いた、柔かい草の上、銀色の白楊の天蓋の下に坐つて！——または池のほとりの葦の間に、くづれ落ちた岸邊の粗い、濕つばい砂の上に寝そべつて！……其處からは節くれ立つた木の根がつき出て居て、大きな、眞黒な血管のやうに、蛇のやうに、地下の王國の遣はし

女のやうに、怪しげな形にもつれ合つて居た……ブウニンは私に彼の一生の物語——あらゆる幸福な、不幸な出來事を事細かに話して聞かせた。私はいつも心からそれに同情を惜まなかつた。彼の父親は補祭であつた。「全く珍らしい位いゝ人でした。が、酒を飲むと、そりやもう極端なほど嚴格になりました。」

ブウニン自身はある神學校でその教育を受けた。が、「笞刑」に堪へる事も出来なかつたし、僧職と云ふものに嗜好を感じる事も出来なかつたので、やがて還俗し、その結果あらゆる種類の艱難を経て、最後には到頭浮浪人にまで成り下がつた。「で、もし私が恩人のバラモーン・セミョーノフチに出會はなかつたならば、」ブウニンはいつも云ひ足すのであつた——彼はバプリンの事をかう云ふ風にしか呼ばなかつた。「私は屹度貧苦と汚濁と惡徳の泥沼に沈んでしまつたにちがひないのです。」ブウニンは調子の高い物の云ひ方が好きであつた——嘘を云ふつもりはないにしても——やゝもすれば物事を氣取つて大袈裟に云ふ癖があつた。彼はあらゆるものに驚嘆し、あらゆるものに歡喜した……そして私もいつの間にか彼にならつて物事を誇張し、あらゆるものに歡喜するやうになつた。「まあ何と云ふ狂氣じみた兒におなりだらう——一體どうした事なんぞせう、」年寄りの乳母は始終私に向つて云ひくした。ブウニンの話はいつも限りなく私を喜ばした、が、その話にもまして私の愛したのは私達がいつも一緒にした讀書であつた。その氣持をそのままに叙述する事は到底不可能である。都合の好い時を見計らつて、彼は突然物語の隱者か精靈のやうに腋下に重たげた書物を抱へて私の前に現はれる、そして怪しげに兩の眼をまたゝいて、その長い、曲

つた指、手招きをしたが、頭で、肩で、肩で、身體全體で物音一つしない園の深みを指し示す、其處にすら行けば何人も後を尋ねることが出来ず、何人も私達を捜し出す事が出来ないのだ！ 私達はそつと家を抜け出す、首尾よく例の秘密の場所の一つに到着して並んで腰を下す、やがてゆつくりと本が開かれる、忽ち私に取つては云ひやうもなく嬉しい微笑と時代との香が鋭く鼻に迫つて来る。そして私はどのやうな胸の戦きを以て、どのやうに不安な無言の期待を以て、ブウニンの顔を、その唇を——今にもあの美しい言葉が流れ出ようとするその唇を見詰めた事だつたらう！ やがて最初の詩の響きが洩れる——身のまはりのあらゆるものはみな消えうせてしまふ……否、消えうせるのではない、何かしらあたゝかい、やさしくいたはるやうな氣持だけをあとにのこして遠い煙のやうに段々にうすれて行くのである……木々も、青葉も、丈の高い草も、みな私達を他の世界からおしへだて、みづからの中につゝんでしまふ、私達が何處に居るのか、何をして居るのか、誰一人として知る者もない——私達と一緒に居るものはたゞ詩ばかりであつた。私達はその中にひたり、その中に酔ひしれた。私達の上には何かしら偉大な、莊嚴な、秘密な儀式が行はれて居るのであつた。……彼は特に詩を——調子の高い、響きの多い詩を賞揚した。彼は自分の魂を詩の爲に捧げる覺悟をして居たのであつた。彼のは只讀むのではなかつた。彼はまるで酔つ拂ひのやうに、熱狂した人のやうに、またはビチャ尼僧のやうに、多少鼻にかゝつた聲で堂々と水の流れるやうに、坂を下るやうに朗吟するのであつた。彼にはもう一つ妙な癖があつた。彼は朗讀に取りかゝる前に先づ小聲で呟くやうにその詩を微吟して見るのだつた……それを彼は自分の下讀と呼んで居た。と、忽

ちその詩の句が大聲に読み出される、彼はベンチから躍り上つて或は祈るやうに、或は命令するやうにその腕をふり上げるのであつた……かう云ふ風にして我々はロモノソフや、スマローコフや、カントミールカントミール（詩が古ければ古いほど、それは一層ブウニンの趣味に合ふのだつた）のみならず、ヘラスコフの「ラシアード」までも讀破した。そして、本當の事を云へば、此「ラシアード」こそ最も多く私の心を湧き立たせたものであつた。その中には一人の勇敢な韃靼の女——女主人公である巨人が居た。今、自分はその名前さへ憶えて居ない、が、その頃はその名前をきいたゞけでも思はず手も足もそつと冷たくなつたのであつた。「さうだ、」ブウニンはよく意味ありげに頭を振りながら云つた。「ヘラスコフ——一度彼に捉まつたら到底逃げ出す事は不可能だ。たつた一節——それで美事に人の心を打碎いてしまふのだ……それで黙つて居るものはいゝ、が、一度彼を本當に理解しようと思ふと、彼は忽ちふり切つて逃れてしまふ、そして、向うからまるで樂隊のやうに銅鑼ではやしたてるのだ。第一名からしてさうだ、ヘルラスコフなんて！」ロモノソフをブウニンはその言葉が餘りに單純で放埒だと云つて非難した。デルジャーキンについては、彼は詩人と云ふよりもむしろ廷臣だと云つて殆んど敵意を以て對して居た。私達の家では文學とか詩とか云ふものに對しては全く何等の注意も拂はれて居なかつた、のみならず、詩、特に露西亞の詩は全く蕪雜な、愚劣なものとして考へられて居た。祖母はそれを詩と呼ぶ事さへ嫌つてわざ／＼「御詠歌」と呼んで居た。さうした御詠歌の作者達は、彼女の意見によれば、いづれも手のつけやうもない飲んだくれか、さもなければ完全な白痴かであつた。かう云ふ考への中に育てられたので、私にとつて

二つの道の中一つはもはやどうしても避け難いものであつた。即ち嫌悪を以てブウニンに背を向けるが（彼はおまけに不潔で頗る不禮儀であつた、それは私の貴族的な習慣にとつては、かなりに厭はしいものであつた）それとも彼に惹きつけられ、誘惑されて、自分もまた彼のやうな詩情によつて毒されるか……私は後者の道をとつた。私もまた詩を、祖母の云ひ方にしたがへば御詠歌をうたひはじめた……私は自分で詩作さへも試みた。そして實際手風琴をうたつた一つの詩を作つた、その中には次のやうな二行があつた。

見よ、太き筒はめぐりて

齒車はきしみそめたり……

ブウニンは此詩の中に一種の擬聲法オナマトイヒがあると云つて賞めた、が、題目そのものは卑しくて到底詩とするに足りないものであると云つた。

あゝ！ あらゆるかうした努力も、感動も、歡喜も、二人きりの讀書も、二人きりの生活も、その詩も、すべては皆一遍に終局おしまひになつてしまつた。不幸は突然霹靂のやうに私達の上に落ちて來たのであつた。

祖母は全くその頃の權勢のある將軍達と同じく——一切の事に清潔と秩序とをたつとんだ。清潔と秩序とはしたかつて我々の庭園においてもまた維持せられなければならなかつた。で、彼女は時

時未納税の百姓や、自分の機嫌をそこねた召使や、餘りものゝ下男などを其處に「追ひ込んで」——道を掃除したり、菜園の草を抜いたり、花床の土をふるつて柔かにしたり、さう云ふ仕事をさせるのであつた。さうした或日の事、祖母は私をつれてその騒ぎの最中の庭園に出て行つた。樹間や草地の到る所に白や赤や空色の襦袢がちら／＼と動いて居た。土を削る鋤の音や、斜めに据ゑられた篩の上に土の落る鈍い響きなどが四方八方から聞えて來た。彼等の傍を通りすぎた時、祖母はその驚のやうな鋭い眼ですぐにその中の一人が仕事にも他の者ほど精を出さず、帽子を取るのもひどく億劫さうにするのを見てとつた。それはひどく瘦せた顔の、落ちくぼんだ暗い眼をした未だ極く若い少年であつた。木綿の上衣はぼろ／＼に裂けて補綴があたつて、狭い兩肩がほとんど露出して居た。

「あれは誰だえ、」祖母は自分のあとから爪先で歩いて來るフィリップアイチに訊ねた。

「奥様は……どの男の事を……」フィリップアイチはおど／＼とどもりかけた。

「チョツ、馬鹿だねえ。あの厭な眼附をして私を見た男の事だよ、彼處に立つて——愚圖々々して居る……」

「あ、あれ、あれで御座いますか……あれはエルミルで御座います、死んだパーヴェル・アフナー
ーシェフの息子で……」

パーヴェル・アフナーシェフと云ふのは十年ほど前に祖母の家の家扶をして居た男で、非常に彼女の寵愛を受けて居た。が、突然その不興を蒙つて俄に家畜方におとされ、はてはその位置さへ

保つ事が出来ずに段々おちぶれて行つて、しまひには何處か遠くはなれた村のむさ苦しい小舎に住んで月々小麦粉一フードだけの手當を貰つてわづかに生命をつないで居た。そして家族一同を極端な貧困の中にのこしたまゝ中風にかゝつて死んでしまつたのであつた。

「へゝえ、」祖母は云つた。「成程、林檎は親木の傍に落るものだと云ふからね。こりや彼奴も何とかしたきやなるまいよ、私はあんな厭な眼附で人を見る人間などに用はないんだからね。」

祖母は家にかへつて——すぐにその手続きをした。三時間ほどたつと、エルミルはもうすつかり準備をととのへて彼女の部屋の窓の下まで連れて來られた。不幸な少年は新しい開墾地へやられるのであつた。彼の所から數歩はなれた垣の向うには彼の貧しい荷物を積んだ百姓馬車が見えた。時代がさう云ふ時代だつたのだ！ エルミルは帽子もかぶらぬ頭を低くたれて、裸足で、長靴を纏てしばつて背にかついだまゝ其處に突立つて居た。お邸の方に向けられた彼の顔には絶望も、悲歎も、困惑の色もなかつた。たゞ愚かしい薄笑ひだけが色のあせた唇に凍りついて居た。乾いた眼は半ばひそめられたまゝ執拗く地面の一角を見つめて居た。やがて彼の來て居る事が祖母の許に知らされた。彼女は長椅子から立上つて、かすかに絹の裳裾を鳴らしながら窓際に近づくやと金縁の二重眼鏡を鼻にかけて今更此新しい追放者の姿を眺めやつた。部屋の中には此時彼女のほかに四人の人間が居た、執事に、バプリンに、當番の給仕に、それから私。

祖母はゆつくりとうなづいて見せた。

「奥様、」突然腹れた、殆んど壓着けられたやうな聲が聞えた。私は後をふりかへつた。バプリンの

顔は眞緋になつて居た……根くなつて殆んど慟ずんで見えた。きつくひそめられた眉の下には小さな鋭く光つた點が見えた……もう疑ふ餘地はなかつた、奥様と呼んだのは明かに彼であつた、バプリンであつた。

祖母もふりかへつた、そしてその眼鏡をエルミルからバプリンにうつした。

「誰だえ……何か云つたのは、」彼女はゆつくりと鼻にかゝつた聲で云つた。バプリンはわづかに前にすゝみ出た。

「奥様、」彼は云ひはじめた。「私で御座います……私は、敢て申しあげます、敢て申し上げますが。

奥様は……奥様の今なすつて居られる事は間違つた事だと考へます。」

「と云ふのは？」眼鏡を外さうともせず祖母は同じ調子で云つた。

「失禮ですが敢て申し上げます、」バプリンは一語一語明らかに云ひなやみながら、それでもはつきりとした口調で云ひ續けた。「私は自身に何の罪もなくして……今遠方の開墾地に追はれようとして居る此少年について申し上げたいのです。かう云ふ爲さり方は、敢て申し上げます、たゞ不満足と……他のよくない結果をひきおこすばかりだと考へます——それは地主方に許されて居る權力の濫用に外なりません。」

「お前さんは……一體何處で勉強しなすつた、」祖母は一寸間をおいてから訊ねかへした。そして眼鏡を外した。

バプリンはまごついた。「何とおつしやいましたか、」彼は口籠りながら云つた。

「お前さんが何處で勉強しなすつたかときくのです——大變難かしい言葉をお使ひだからね。」

「私……私の教育……」パブリンは云ひはじめた。

祖母は輕蔑しきつたやうに肩をそびやかした。「多分、」彼女は對手の言葉をさへぎつて云つた。「私のやり方がお前さんの氣にいらぬと見えませぬ。が、そんな事は私にとつてはどうでもいゝ、私は自分の家來に對しては絶對の權利を持つて居ます、誰に對しても責任はありません——たゞ私は今迄私の眼の前で私の事を批評したり、自分の知つた事でもない事に口を出す人間には出會つた事ありませんよ。私は學者の博愛家などには用はないのだ、私の欲しいのはたゞ黙つて私の云ふ事をきく召使なのです。私はお前さんの來るまでさうしてやつて來ました。お前さんが行つてからもさうしてやつて行かうと思ひます。お前さんは私にはあはない。何處へでも行つて下さい。ニコライ・アントノフ、」祖母は執事の方に向けて云つた。「此人に勘定を拂つて、お晝までに立たせてしまつておくれ。解りましたね。私に腹を立たせないでおくれ。それから一人、此男の居候をして居る馬鹿者も一緒に追ひ出しておしまひ——エルミルカは何を待つて居るんだえ、」彼女はまた窓の方を見やつて云ひ足した。「私はもうあれを見ました。此上何の用があるんだえ、」祖母は執拗い蠅でも追ふやうに窓の方に向けて手巾を振つた。そして腕椅子に腰を下すと、私達の方に向き直つていかつい聲で云つた。「みんな此部屋から出て行つておくれ。」

私達はみんな——當番の給仕をのぞくほかはみんなその部屋を引き退つた。給仕にだけは祖母の言葉はあてはまらなかつた、と云ふのは、彼は「人間」ではなかつたから。

祖母の命令は一言も違はずに實行された。パブリンも私の友達のブウニンも晝にならない前に屋敷から出て行つてしまつた。私は今その時の自分の悲しみ、眞實な、子供らしい絶望の情を述べようとは思はない。それは事實あの共和主義者パブリンの大膽な振舞ひによつて私の中に惹き起された畏敬の念をすら壓潰してしまつたほどに強いものであつた。祖母とのあの議論の後、彼は直ぐに自分の部屋にかへつて荷造りをはじめた。彼は私には言葉もかけず、眼をくれようとさへもしなかつた、私はしまひまで彼の傍に、つまり——事實は——ブウニンの傍に喰附いて居ただけだ。ブウニンはずつかり放神してしまつて居た。彼もまた一言も口をきかず、たゞ絶間なくちつと私の上を凝視して居た。彼の眼の中には涙があつた……始めから終りまで一つ涙であつた、溢れ落ちもしなければ乾上りもしなかつた。彼は自分の「恩人」を批評しようなどとはしなかつた——パラモーン・セミヨイヌイチが間違ひをするなど云ふ事は到底ありうる事ではなかつた——たゞ彼はひどく力をおとして悲しむだけであつた。私とブウニンとはお別れにもう一度「ラシアード」の中の一節を朗讀しようとするところをみた。私達はその爲に物置部屋にとちこもりさへした——庭に出て行かうなどとは夢想だにしなかつた——が、最初の一聯で二人とも聲がつかまつてしまつた。そして私は十二と云ふ年齢にもかゝはらず、いつももう大人だと云つて威張つて居たにもかゝはらず、續のやうな大聲をあげて泣きはじめた。到頭二人とも馬車に乗りうつつた。パブリンは始めて私の方に向いていつもの嚴しい顔をわづかに軟らげながら云つた。「若旦那、これは君にとつても一つの教訓です

ぞ。此出来事をよく憶えておきたまへ。そして大きくなつたならばかう云ふ不正な行爲は必ず絶滅するやうに努めたまへ。君の心は善良だ、君の性質は未だ腐敗して居ない……よく考へて氣をつけたまへ。物事はかう云ふ風であつてはならないのだ！」私は鼻をつたひ、唇をつたひ、顔をつたつてあとからく流れ出る涙に咽びながら、屹度此事を憶えて居る事を……屹度、屹度その通りにして見せる事をおろく聲で彼の前に誓つた……

が、此時忽ち思ひ掛けぬ憤激がブウニンを襲つた——私達はそれまでに殆んど二十度も抱擁しあつた。私の頬は剃刀の當らない彼の頸背の爲に熱く燃え上り、身體には彼の獨特の體臭が隅々までしみわたつた——彼は突然馬車の座席の上に躍り上つて両手を高く投げあげると、いきなり雷のやうな聲で（彼は何處からそれを持つて來たのか？）デルジャヤーギン——彼も此時は廷臣ではなくて詩人であつた——の作の有名なダビテの詩篇の譯を誦しはじめた。

全能の神立ち出でまして

諸王の集ひにもろくの審判をあたへたまふ、

いつまでか、かく神は宣ふ、心よからぬ者、惡しき者を許してあるや、
律法を保つは汝等の債務ならずや……

「坐り給へ、」バブリンは彼にむかつて云つた。

ブウニンは腰をおろした。が、歌はやめなかつた。

罪なきものゝ憐れみを救ひ、

乏しきものに休息を與へ、

虐ぐるものゝ力をくぢき、

ブウニンは「虐ぐるもの」と云ふ句のところて私達の屋敷を指さし、次に馭者臺に坐つて居る馭者の背を指さした。

貧しきものゝ鎖を打碎かんはまこと汝等の債務ならずや。

されど彼等は心せず、知らず、さとらず……

ニコライ・アントーノフが邸の中から駈け出して來て、あらんかぎりの聲で馭者に向つて怒鳴りつけた。「早く行つちまへ！ 畜生めら！ 行つちまへ！ 愚圖々々してゐると承知しないぞ！」馬車は動き出した。歌の聲だけが遠くから聞えて來た。

立ち出でませ、正義の大神よ、

來りて裁きませ、罪しませ、心惡しき者を——

御神ひとり此世ををさめませ！

「何てえ道化た野郎だ、」ニコライ・アントーノフは云つた。

「若い時分に鞭を喰ひ足りなかつたと見えるて、」補祭が階段口に出て來て相槌をうつた、彼は夜

の勤行は何時頃がいゝか、奥様の御都合を伺ひにやつて来たのであつた。

その日、エルミルが未だ村に居る事を、翌朝でなければその法律上の手続き（それは地主達の勝手な行爲を制限する目的で設けられたものだ）が、事實はたゞ監督官廳の役人共の臨時収入の源として役立つて居るばかりであつた）を受け居る爲に町には行かない事を知つて、私はやつと彼をさがし出し、金は自由にならなかつたからその代りに小さな包みをつくらせてやつた。私はその中に手巾を二枚と、穿き古した短靴と、櫛と、古い寝衣と、それから買ひ立ての襟飾を一つ入れておいた。エルミルは、私は彼が裏庭の荷馬車の傍で、藥束の上に寝て居るのを揺り起したのだつたが、私の贈り物を多少躊躇の色を見せながら、しかし寧ろ冷然と受取つて、お禮を云はうともせず、いきなりまた麥藥の中に首をつつこんでうとくと寝入つてしまつた。私は少からず失望して彼の傍をはなれた。私は彼が私の訪問に驚いてひどく嬉しがり、屹度その中に私の將來の寛大な遺方に對する保證をみとめてくれるだらうと想像して居たのだつたに——それなのに……

「何と云つたつて——あゝ云つた連中は感情と云ふものを持つてないんだ、」私は母屋の方にもとる途々考へた。

祖母はどうした理由からかその私にとつては記念すべき幾日かの間全く私を自由にしておいてくれた、が、その夜夕食の後で夜の挨拶を云ひに行くと、はじめ不審さうに私の顔を眺めた。

「お前、眼が赤いね、」彼女は佛蘭西語で云つた。「それに百姓小舎の臭ひがするよ。私はお前の心

の中やお前の仕業を穿鑿しようなどとは思ひません——お前を罰しなけりやならないなんて厭だからね——けど、もういゝ加減にお馬鹿さんはやめて、も一度育ちのいゝ子供らしくなつて貰ひたいと思ふんだよ。けど、もうぢきモスクワに歸るから、そしたらお前にも一人家庭教師を僱つてあげることしよう。お前ももう男の先生でなくちや手に負へないやうだからね。さあ、行つてよろしい。」

事實、私達はその後間もなくモスクワにかへつた。

2

——一八三七年——

七年は過ぎ去つた。私達は以前のとはほりモスクワに住んで居た——が、私はもう大學の二年生で祖母——彼女も此二三年めつきりと衰へを見せて来た——の力ももはや殆んど何の權威も持たなかつた。すべての學校仲間のうち私の最も親しくつき合つて居たのはタールホフと云ふ快活な、人の好い青年であつた。二人の習慣と趣味とが一致したのであつた。タールホフは熱心な詩の愛好者で、自身でも作詩をこゝろみて居た。私の中にもまたゾウニンの播いた種が實をむすばずには居なかつた。私達は極く親しい仲の青年達の間によくあるとほり、お互ひの間に少しも秘密と云ふものを持たなかつた。か、どうしたのか、此數日と云ふもの引續いて、私はタールホフが何故かそはくくと

して少しも落着かないのに気がついた。……彼は時々不意にその姿をかくした——何處に行くのか私はまるで知らなかつた。さう云ふ事はそれまでには決してない事だつた。私は、友情の名において、一切の事情を白状させてやらうと心にきめたほどであつた……が、彼の方から先手を打つて來た。

或日私は彼の部屋に坐つて居た。「ペーチャ、彼は突然眞紅に顔を赧めて、ちつと私の顔を凝視めながら云ひ出した。「僕は君に僕のムウザを紹介しなければならん。」

「君の美の女神を！ 何て妙な云ひ方をするんだ、まるで古典主義者ぢやないか。(其頃は、一八三七年頃は浪漫主義の全盛時代であつた) それぢや僕が今迄まるで——君の美の女神を知らなかつたやうに聞えるぜ。何だい、新しい詩でも出來たのかい？」

「いや、君は僕の云つてゐる事がわからないんだ、」 タールホフは矢張り赧い顔で笑ひながら云ひかへした。「僕は君に生きたムウザを紹介するんだよ。」

「あゝ、さうなのか。が、どうしてその女が——君の美の女神なんだ？」

「うむ、そりや……が、待ちたまへ、どうやらあの女が來たやうだぞ。」

軽い、輕快な靴の音が聞えて、扉がさつと開いた——扉口に現はれたのは十七八の少女であつた。飛白模様の更紗の上着に黒羅紗の肩外套を羽織つて、ブロードの稍縮れ氣味の髪の上に黒の麥稈帽子をかぶつて居た。彼女は私を見るとハツとしたやうに顔を赧めて一足後へ退つた……が、タールホフは直ぐに飛び出して行つて彼女を迎へた。

「どうぞ、どうぞ、ムウザ・パーヴロヴナ、どうぞおはいり下さい。これは僕の親友で、全く素晴らしい人間です、温和しい、そりや温和しい人間です……ちつとも怖がることはありません。ペーチャ、彼は私の方を振り向いた。「僕のムウザを紹介するよ——ムウザ・パーヴロヴナ・キノグラードワさん、僕の親友です。」

私は頭をさげた

「一體……ムウザと云ふのは……」私は云ひかけた。

タールホフは笑ひ出した。「君は教會暦の中にかう云ふ名前があつたのを知らないのかね？ いや、僕も實は此親愛なるお嬢さんにお目にかゝるまでは知らなかつたんだよ。ムウザ、何と云ふ魅力のある名前だらう！ そして實によく此人に似合つて居る！」

私はもう一度自分の友人の親友に對して頭をさげた。彼女は扉口をはなれて二足ほど前に進むと、そのまま其處に立止つてしまつた。全く彼女は愛らしい顔立をして居た、が、私はタールホフの意見にそのまま賛成する事は出來なかつた、そして心の中でこんな事を考へさへした。「ふむ、こりや何と云ふミュウズだ！」

彼女の丸い薔薇色の顔の輪廓は頗る繊細な、巧緻なものであつた。精巧な繪畫のやうなすつきりした身體の到る所に生き／＼とした、彈力のある青春の力が匂つて居た。が、ミュウズとしては、ミュウズの化身としては、私はその頃——私一人ではなく、その頃すべての青年は、みなひどく遠つた考へを持つて居た。ミュウズは先づ何よりも先に黒い髪をして、蒼白い皮膚の色を持つて居な

ければならなかつた。侮蔑的な矜持の表情、骨を刺すやうな冷たい薄笑ひ、此世ならぬ眼の色——それから何かしら神秘的な、悪魔的な、運命的な「或物」——それが私達の考へて居たミュウズ、當時の人の心を支配して居たバイロンのミュウズになくはならないものであつた。が、今はいつて来た少女の顔にはそれに似たやうなものすらもみとめられなかつた。もし其時私かも少し年をして経験を積んで居たならば、私は多分彼女の眼の色にもつと注意を拂つた事だつたらう、それはやや厚ぼつたい眼瞼の下に小さく深んで見えたが、しかし瑪瑙のやうに黒く生き／＼と輝いて居た——それはブロンドの人には全く珍しい事であつた。私はたとへそのすばしこい、一刻もちつとして居ない眼眸の中に詩的な傾向をこそ見出す事は出来ないまでも、少くとも恐しく情熱的な、自分の身などは顧みようとせぬほど情熱的な魂をみとめる事が出来たはずであつた……しかし其頃私もまだほんの少年であつた。

私はムウザ・パーヴロヴナに手を差し出した——が、彼女は應じなかつた、彼女ははじめから私のその動作を認めて居なかつた。タールホフの据ゑてやつた椅子に腰は下したが、しかし帽子も肩外套も脱らうとしなかつた。

彼女は明らかにもし／＼して居た、私の居るのが邪魔になるのだつた。そして時々喘ぐやうにはげしく、深く息を吸ひ込んだ。

「私、たゞちよつとあがりましたの、ウラヂーミル・ニコライイチ、」彼女は始めて口を切つた——しづかな、胸の底から出て来るやうな聲であつた、その紅い、まるで子供のやうな唇からさう云

ふ聲を聞くのがむしろ不思議なやうな気がされた。「おかみさんがどうしても半時間以上は出してくれないんです。一昨日、貴方はお加減が悪かつたでせう……それで、私……」

彼女は不意に口籠つて項を垂れた。濃い、深い眉のかげに、彼女の暗い目は電光のやうにあちこちに動いて居た。夏の日盛りの頃、乾き上つた草の葉の間を、時々眞黒な、活潑な甲蟲がそんな風に翅をひからせながらとびまはる事がある……

「貴女は何て可愛い、人てせう、ムウザ、ムウゾチカ！」タールホフは叫んだ。「それにしてもちよつとはいゝでせう、ね、ちよつともいゝから話してつて下さい……今、すぐサモワールの仕度をしますから……」

「あ、いゝえ、ウラヂーミル・ニコライエギツテ！ ととても駄目なの！ 私、もう行かなくては……」

「ならちよつともいゝから休んでらつしやい。貴女は息を切らして居られる……疲れてるに相違ないんだ。」

「いゝえ、疲れてるんちやありませんの。私……いゝえ、その所爲ぢやないの……たゞ……もう一冊御本を貸して頂けて？ これはもう読んでしまひましたわ、」彼女は灰色のぼろ／＼になつたモスクワ版の小さな本を衣袋から取り出した。

「えゝ、どうぞ、どうぞ。で、どうでした、お氣にいらしましたか？ ロスラーヴレフなんだ、」タールホフは私の方に向いて云ひ足した。

「ええ。けど、ユーリー・ミロスラーフスキーの方がずつといふと思ひますわ。私共のおかみさんはそりや御本の事が喧ましいんですの。仕事の邪魔になるつて云ひますのよ。つまりあの人の考へでは……」

「けど、ユーリー・ミロスラーフスキーもプウシキンの『ジブシイ』の比ぢやありませんね。え、ムウザ・パーヴロヴナ？」

「まあ！『ジブシイ』は……」彼女はゆつくりと一字々に發音しながら云つた。「あゝ、さうでしたつけ、ウラデーミル・ニコラーイチ、明日はどうかお出でにならないで下さい……あの、いつもの所へ……」

「何故です？」

「駄目なんですの。」

「何故駄目なんです？」

少女は肩をすくめた、そして突然つきとばされてもしたやうに椅子から立ち上つた。

「何處へ行くんです、ムウザ、ムウゾチカ、」タールホフは哀願するやうに叫んだ。「少し位いふぢやありませんか！」

「いゝえ、いゝえ、駄目ですの、」彼女は素速く扉に歩みよつて把手をつかんだ……

「がや、せめて本でも持つてらつしやい。」

「ええ、また此次に。」

タールホフは少女の傍に駆け寄つた。が、彼女の姿はその瞬間に部屋の外に消えてしまつた。彼は危く扉に鼻面を打つけるところだつた。「何と云ふ女だらう……まるで蜥蜴だ、」彼はやゝがつかりしたやうに云つてそのまゝぼんやりと考へ込んでしまつた。

私はそのまゝタールホフの所に残つて居た。一體どうした事なのか、私はそれが知りたかつた。タールホフもかくさうとはしなかつた。彼はこの少女が——普通の町の娘で、或仕立屋につとめて居る事、三週間ほど前、田舎に居る妹の爲に帽子を誂へに行つてその店で始めて彼女を見た事、一目見て忽ち惚れこんでしまつて、次の日早くも街路で彼女に話しかけることに成功した事、それから彼女の方でもどうやら自分に思召しがあるらしい事、などを話してきかせた。

「たゞ、君、どうか願ひだから、」彼は熱をこめて云ひ足した。「彼女の事を妙な風に思はないでくれたまへ。少くとも今の所までは僕等の間には何も變な事はありやしないんだから……」

「そんな變な事なんか思ひやしないよ、」私は云ひかへした。「同時に君が今日の事をひどく悲しんでるつて事も疑はないよ。けど、まあ辛抱したまへ——その中萬事よくなるさ。」

「そりや僕もさう思つてる、」タールホフは懶げに、それでも笑ひながら云つた。「しかし、實際、君、あの女は……君の前だが、あれは全く新しい型だぜ。君はあれをよく見る隙がなかつたね。あれは全く自然兒だ、さうだ、全く自然兒だよ！ それに片意地な事と來たら、そりやとてもお話にならない位なんだ！ しかし、その自然な所に僕は惚れこんでしまつたんだよ。僕は、君、實際首つたけなんだぜ！」

タルルホフは夢中になつて自分の「対象」についてのべたてた「吾がミュウズ」と題した詩の一章を讀んできかせさへした。が、さうした露骨な感傷は到底自分の趣味にあはなかつた。私はひそかに彼に對して嫉妬を感じた。私は間もなく彼の宿を出た。

二三日たつて私は偶然ガスチーヌイ・ドゥウ・ウォールの或街路を歩いて居た。土曜日で、街は買物の人達で一杯だつた。その雑沓の到る所から商人達の客を呼ぶ騒がしい聲が聞えて來た。入用なのは買つてしまつたあとだつたので、私はたゞ一刻も早くその不愉快の呼聲をのがれる事だけしか考へて居なかつた。が、突然私は否應なしに其場に立止らされてしまつた、とある果物店の店先に自分の友人の戀人を——ムウザ、ムウザ、パーヴロウナの姿をみとめたのであつた。彼女は横顔を私の方に向けて——何事かを待つて居るやうな容子に見えた。暫くためらつた末、私は彼女に近づいて話しかけて見ようと決心した。が、私が鬨をまたいて帽子を脱るや否や——彼女はまるでおびえたやうに一步後へ退つて、あわてゝ恰度番頭に乾葡萄を量らせて居た粗羅紗の外套を着た老人の方にふりむいて、まるで救ひをでも求めようとするものゝやうにその手をにぎりしめた。老人もびつくりして彼女の方をふりかへつた——そしてその時の私の驚きは！ 私は彼の中に——ブウニンをみとめたのであつた！

さうだ、本當に彼であつた。赤味を帯びた小さな眼、ふつくりした唇、低く垂れ下つた柔かい鼻。彼はその七年の間に殆んど少しも變つて居なかつた。たゞ顔が少しむくんだやうに見えるだけ

だつた。

「ニコラ・ドゥル・ヴァギールイデ！」私は叫んだ。「私がお解りになりませんか？」ブウニンははつとしたかすかに口を開けて、ぢつと私の顔をのぞきこんだ……

「さあ、私は、」彼は云ひかけたが、忽ち細い、鋭い聲にかはつた。「トロイツキーの坊ちゃん！

(私の祖母の領地はトロイツキーと云つた) トロイツキーの坊ちゃんぢやありませんか？」乾葡萄が手からすべり落ちた。

「さうです、さうです、」私は答へた、そしてブウニンの買物を床から拾ひ上げて、彼に接吻した。彼は喜びと昂奮との爲に呼吸が出来なかつた。彼は殆んど涙を流さんばかりであつた、そして帽子を脱つて——私は彼の「卵」に僅に残つて居た毛も今は跡方もなくなつて居るのを見た——その底から手巾を取り出して、涙をかんで、帽子を乾葡萄と一緒に懐におしこんで、またそれをかぶつて、また乾葡萄の包みを地に落した……私はその間ムウザがどんな風にして居たか知らない、私はつとめて彼女の方を見ないやうにして居た。私はブウニンの此動搖が私自身に對する愛着の爲だつたとは思はない、たゞ彼の性質がいかなる突發事にも堪へる事が出来なかつたのであつた。可哀さうな變人の神經よ！

「私達の所へ行きませう、私達の所へ、」彼はやつとの事て云ひ出した。「私達の慣ましい墓に行くのは厭だなんて云ひはしないでせうね。お見受けしたところ、あんたも大學生……」

「いゝえ、そんな事はありません。喜んでお供しますよ。」

「あんたはもう自由の身ですか。」
「ええ、全く自由です。」

「其奴ア素敵だ！ パラモーン・セミヨイヌイチはどんなに悦ぶだらう。今日はあの人もいつもより早く歸ります。それに、ほら、土曜日には此娘にもおかみさんが暇をくれるのです。が、さうだつて、御免なさい、私はすっかり忘れて居た、あんたは未だ私達の姪を御存じなかつたのですね。」
私は急いで口をはさんで自分が未だその喜びを得ない旨を云つた。

「そりや勿論だ！ 貴方が此娘を知つてなさる筈はないんだから……ムウゾチカ——ねえ、お聞きなさい、此娘の名はムウザと云ふんです——綿名ぢやない、本當の名なんです……何かの因縁ですね、屹度。ムウゾチカ、私はお前を此方に……この……」

「ペー……」私は傍から云つた。

「ペー……さん、」彼はそれを繰返した。「ムウゾチカ、よくお聞き、今お前の前に居られる此方は此上ない立派な、尊敬すべき方なのだ。運命は此方が未だほんの子供の時分に私達を結びつけた！ あんた、どうか此娘を愛して、面倒を見てやつて下さい！」

私は丁寧に頭を下げた。ムウザは罌粟の花のやうに緋くなりながら、上眼にちらと私を見上げてまたすぐに眼を伏せてしまった。

「あ、」私は考へた。「君は面倒な事が起つた場合に蒼くならず緋くなる方の人ですね。これは是非おぼえておかなかちや！」

「お咎めにならんで下さい、これは社交向きの貴婦人ぢやないんですから、」ブウニンは云つて店から通りへ出た。私とムウザはそのあとにしたがつた。

ブウニンが宿をとつて居る家はサドーワヤ街であつたから、ガスチーヌイ・ドゥ・ワールからは可成りの距離であつた。途々——私の以前の詩の先生は自分の生活の容子をいろ／＼と詳しく話してきた。私達と別れて以來、彼も、パブリンも聖なる露西亞の國中を殆んど隈なく轉々して歩いた、そしてつひ此頃、一年半ばかり前にやうやくモスクワに永住の地を見出した。パブリンが商人で工場も經營して居る或富家の事務所に首席書記の地位を贏ち得たのであつた。「ぼろい地位にはありません、」ブウニンは溜息を吐きながら云つた。「仕事が多くて、収入は少い……が、他にどうしやうがあるのだ、それさへも神に感謝しなければなりません！ 私も寫字や出稽古で少しでもいゝから稼がうとしました。が、私の努力は成功を見る事が出来なかつた、私の手蹟は、憶えても居られるでせうが、ひどく古風でね、今時の趣味とはあふ事が出来ない。出稽古の方は——これはちやんとした服装のない事が一番邪魔をしました、それに、教授の上でも——露西亞文學の教授です——私のおそれたのはやはり私が現代の趣味に適合する事の出来ない」と云ふ點でした。それで私はいまだにひとりたゞ坐して飢ゑて居る。(ブウニンは例のかうされた、壓潰したやうな聲で笑つた。彼は今もなほ以前の誇張した物の云ひ方、ともすれば韻を踏んで物を云ふ癖を失つて居なかつた) みんな新しいものへ、新しいものへと飛んで行くのだ。貴方も屹度古い神はないがしろにして、新

しいものゝ前に額づいて居るんでせう？」

「が、貴方は、ニカーンドル・ヴァキールイチ、やつぱりヘラスコフを尊敬して居られますか？」

「此上なく！ この上、な、く！」

「で、ブウシキンはお読みになりませんか？ ブウシキンはお厭ですか？」

「ブウシキン？ ブウシキンは蛇だ、鷲の咽喉をめぐまれないながら、緑の枝の中にかくれて居る蛇だ！」

ブウニンと私とがこんな風に話しながら、所謂「白き石の」モスワ——實際は「かけの石もなく、また全然白くはない——の凸凹の煉瓦道を足許に気をくばりつゝ歩いて行く間——ムウザは静かに私達と並んで、私とは反対の側を歩いて居た。彼女の事を云ふ時、私は「貴方の姪御さん」と云ふ言葉をつかつた。ブウニンは一寸の間黙つて居たが、やがて頭を掻いて、聲をおとして、彼女を姪と呼んだのは……たゞさう云つただけで實際は親戚でも何でもないのでと云つた。それから彼女はプローニエシの町でバプリンが拾つて育て、居る孤兒である事、が、彼は、ブウニンは眞實の娘にもまして彼女を愛してゐるから、娘と呼んでも少しも差し支へない事、などを話してきかせた。ブウニンはわざと聲をおとしたけれど、ムウザには彼の云つた事がすつかり聞えたに相違なかつた。彼女は同時に怒り、怖ぢ、且つ愧ぢて居た。彼女の顔の上にはたえず光と影とが馳せちがひ眼臉も、眉も、唇も、狭い鼻孔も、あらゆるものがみなかるくふるへうごいて居た。それがひどく

愛らしく、面白く、そして不思議だつた。

が、やがて私達はブウニンのいはゆる「愉快な集」についた。それは全く愉快な集であるにちがひなかつた。小さな殆んど地にめりこむばかりになつた一階建ての家で、板屋根は歪み、正面の四つの窓も恐しく暗く汚れて居た。家具は最も貧しいもので、それもろくに片附いてさへ居なかつた。窓の間や壁際には雲雀や金絲雀や鶯や金翅雀などの入つた小さな鳥籠が殆んど十あまりも懸つて居た。「私の家來どもです、」ブウニンは指先でそれを指しながら嚴めしい聲で云つた。私が部屋に入つて身のまはりを見まはす間もなく、ブウニンはすくなくムウザに云ひつけてサモワールを取りに行かせた。と同時にバプリンが部屋の中にはいつて來た。彼はブウニンに比べるとずつと老けたやうに見えた。歩きつきは元の通りしつかりして、顔の表情も概して變つては居なかつたけれど、身體は瘦せて前屈みになり、頬は落ちこみ、黒い、濃い髪の間にも——ちら／＼と白いものが混つて居た。彼は私がかつた——そしてブウニンが私の名を云つた時も、何等特別な喜びの色は見せたかつた。彼は眼に微笑を浮べようとさへもしなかつた。たゞわづかに頷いて、ひどく無愛想にそつげなく——私の「婆さん」はまだ生きて居るかどうかたづねたばかりであつた。たゞそれだけであつた。「自分は貴族の訪問を受けた事を驚きはしない。嬉しいとも思はない、」彼はさう云つて居るやうに見えた。共和主義者はどこまでも共和主義者であつた。ムウザが歸つて來た。よほど婆の婆さんが彼女のあとから錆びたサモワールを持つてついて來た。ブウニンは忙しく立働いて色

色なものを備めはじめた。パブリンは卓子に坐つて、兩手で頭を支へるとひどく、疲れたやうな眼で身のまわりを見まはした。が、茶がはじまると、彼もやうやく重い口を開いた。彼は自分の地位に不満足であつた。「握り拳だ、人間ぢやない、」彼は自分の主人の事をそんな風に云つた。「配下の人間は、彼にとつては——云はゞ塵芥にすぎないのだ。自分自身つひ此間まで襤褸をさげて居た癖に……残忍、貪慾、たゞそれだけだ。彼奴の仕事は——政府のよりひどい！ 此處の取引は一切虚偽の上に立つて居る、たゞそれだけで保つて居るのだ！」さう云ふ呪はしい話をきくと、ブウニンは悲しげに溜息を吐いて對手の言葉を諸ひ、或は上下に、或は右左に頭を振つた。ムウザは頑固に黙りつけゝて居た……彼女は明らかに私がどう云ふ人間であるか、控へ目な人間か、それとも饒舌家か、もし控へ目にして居るとすればそれは何か特別な考へがあつてかどうか、さう云ふ疑惑の爲にじり／＼して居た。彼女の暗い、素ばしこい、落着かない眼は絶えずその低く垂れた眼瞼の下に動いて居た。たゞ一度彼女は眼をあげて私の方を見た——疑はしげな、意地の悪い殆んど憎惡を含んだ眼附であつた……私は思はず身をふるはした。パブリンは殆んど彼女には話しかけなかつた。が、たまに話しかける時には、彼の聲には不思議に絶鬱な、父親とは思はれない情愛がこもつて居た。

ブウニンは、反對に、時々ムウザに冗談を云ひかけた。が、彼女は厭々に答へるだけであつた。彼は彼女の事を雪女、雪の精と呼んだ。

「何故ムウザ・パーヴロヴナにそんな名を上げたんです、」私はたづねた。

ブウニンは笑つた。「此娘があまり冷いからですよ。」

「俐巧なんだ、」パブリンがあとについて云つた。「若い娘はその方がいいよ。」

「奥さんと申し上げてもいゝんです、」ブウニンは叫んだ。「さうぢやないか、バラモーン・セミーヌイチ？」パブリンは眉をひそめた。ムウザは顔をそむけてしまつた……私には何の事だかわからなかつた。

そんな風にして二時間ほどすぎた……妙にじめ／＼した會合であつた、ブウニンはその「名譽ある會合に興をそへる」ためにあらゆる努力を惜まなかつたけれど。たとへば、彼は金絲雀の籠の前に蹲つて、扉を開き、眞面目な顔で命令を下した。「丸屋根にとまつて、演奏を始めなさい！」金絲雀はすぐに籠からとび出して丸屋根つまりブウニンの禿頭に飛びひらつると、あちこち向きをかへて小さな翼を羽搏きしながら、精一杯の聲で囀りはじめた。演奏のつゞく間ブウニンは全く身動き一つしなかつた、たゞ眼をほそめて、指先でかすかに調子を取つて居るだけであつた。私は思はず聲を立て、笑ひ出してしまつた……が、パブリンもムウザも顔の筋一つ動かさなかつた。

いよ／＼別れると云ふ間際になつて、パブリンは全く思ひ掛けない質問で私を驚かした。彼は、大學に學んで居る人として私に、ヴェーノーンとはどう云ふ人であつたか、彼の事をどんな風に考へて居るかそれを聞きたいと云つた。

「ヴェーノーンと云ふと？」私は幾分當惑しながら訊ねかへした。

「ヴェーノーン、古代の賢人です。まさかヴェーノーンを知らない事はないでせう？」

私はぼんやりとストア學派の基礎をおいたヴェーノーンの名を思ひ出した。が、私はそれ以外の事は全く何も知らなかつた。

「さう、彼は哲學者でした、」私はやつとの思ひで云つた。

「ヴェーノーンと云ふのは、」バブリンは一語一語はつきりと發音しながら云つた。「忍耐は萬事に打勝つが故に苦惱は決して悪ではない事、此世における善はたゞ一つ正義あるのみで、徳の本質はすなはち正義にはかならないと云ふ事をのべたあの賢人です。」

ブウニンは敬虔な面持で耳をかたむけた。

「古い書物を澤山漁つた此處に居る此人がその格言を教へてくれました、」バブリンは云ひつゞけた。「それは大變私の氣にいりました。が、君はさう云ふ題目にはあまり興味がないと見えますね。」

バブリンの云つたのは嘘ではなかつた。さう云ふ題目には——私はたしかに興味がなかつた。大學にはいつてからは私自身バブリンにも劣らない位の共和主義者になつて居た。ミラボオやロベスピエールの事なら、私は喜んでいくらでも話したらう。さうだ、ロベスピエール……それから私はフリーキエ・タンヴィルとシヤリエーの石版畫を卓子の上に懸けておいた！が、ヴェーノーンとは！何處からヴェーノーンなどをひつぱり出して來たのだ！

ブウニンは私と別れの挨拶をしながら、翌日の日曜も是非其處に訪ねて來るやうにと熱心に云張つた。バブリンは全然私を誘はうとはしなかつた。たゞの平民とも話をしてもどうせ愉快な事は

ないだらう、それにどうせ婆さんの氣にいらぬにきまつて居る、と云ふやうな事を咬きさへした……

……が、私は彼の言葉をさへぎつて、祖母はもう私に對して何等の權威をも持たない事を云張つた。

「が、財産は未だ君のものぢやないでせう？」バブリンは云ひかへした。

「え、未だ私のものぢやありません、」私は答へた。

「では、結局……」彼はしまひまで云ひきらなかつた。が、私は彼に代つて心の中で云ひ足した。

「結局、私は未だ子供なんだ。」「さやうなら、」私は聲高に云つて、その部屋を出た。

私は中庭から通りへ出ようとして居た……突然ムウザが家の中から駈け出して來た、そして熾苦茶になつた紙片を私の手の中に押込むと、またすぐに姿を消してしまつた。最初にぶつかつた街燈のところではその紙片を擴げて見た。それは手紙であつた。私はひどく骨を折つてその鉛筆で薄く書かれた文字を判讀した。「後生です」ムウザは書いて居た。「明日彌撒の後アレクサンドロフスキー公園のクターフィヤ塔の傍まで御出て下さいお待ち申します私のお願いをお聞き入れ下さい」そして私を不幸な目からお救ひ下さい私は是非とも貴方に御目にかゝらなければならぬのです」綴字の誤りもなかつたけれどまた句讀一つない手紙であつた。私はぼんやりとした暗い心で家に歸つた。

翌日、指定の時間の十五分前にクターフィヤ塔の方に歩いて行つた私は（四月の始めてあつた。木の芽は膨らみ、草は青み、雀は赤裸のライラックの茂みて喧しく囀つたり喧嘩したりして居た。）

柵から程遠くない道のかたへにムウザの姿を見出して少からず驚いた。彼女は私よりも先に其處に來て居たのであつた。私は彼女の傍に近づかうとしたが、向うから先に此方へ歩みよつて來た。「クレームリの城壁に參りませう、」彼女は伏目にあたりを見廻しながら急ぎ込んだ聲で叫んだ。

「こゝは人が居ますから。」

私達は丘をのぼつて行つた。

「ムウザ・パーヴロフナ、」私は云ひかけた……が、彼女はすぐに私の言葉を遮ぎつた。

「どうか、」彼女は例のはげしい、その辯妙にしづかな聲で云ひ出した。「私を批評しないで下さい、私の事を悪く思はないで下さい。私は貴方に手紙を書きました、此處でお會ひ出来るやうにお願い致しました——それは、私、心配だつたからです……昨日、私は貴方が何だか始終笑つて居られるやうな氣が致しました。よござんすか、」彼女は不意に力強い聲で云ひかけると、突然道端に立止つて私の方をふりかへつた。「よござんすか、もし貴方が誰と……誰の部屋で私とお會ひになつたか他人におつしやれば、私、すぐに水に身を投げてしまひますよ、身投げして、自殺してしまひますよ！」

彼女は此處ではじめて例の探りを入れるやうな、鋭い眼をあげて私を見た。

「此女なら或は本當に……そんな事をしかねないぞ、」私は考へた。

「ねえ、ムウザ・パーヴロフナ、」私はそゝくさと云ひかへした。「何故僕の事をそんなに悪くお取りになるんです？ 僕に自分の友人を裏切つたり、貴女を傷つけたりする事が出来るともお思ひ

になるんですか？ それに、僕の知つて居る限りでは、貴女方の關係には何も非難すべき點はないぢやありませんか……どうか、決して御心配ないやうに。」

ムウザは其場に立止つたまゝ身動きもせず、もう私の方を見ようともせずになんか黙つて終まで私の云ふ事をきいて居た。

「私、未だ貴方にお話しなけりやならない事があるんです、」ムウザは再び歩き出したが云ひはじめた。「ぢやないと、貴方は屹度私を狂人だと思ひになるにちがひありません……實は、あの年寄りが私と結婚しようと言ふのです！」

「どつちの年寄りが？ 禿げた方ですか？ プウニン？」

「いゝえ、あれぢやありません！ も一人の方……バラモーン・セミョーヌイチです、」

「バプリンが？」

「えゝ。」

「本當ですか？ あの人が貴女に申し込んだのですか？」

「さうですの。」

「が、貴女は、勿論、承諾しなかつた？」

「いゝえ、承諾したんです……其時分、未だ何もわからなかつたものですから。が、今は——ちがひます。」

私は思はず両手をあげた。「バプリンと——貴女が！ だつて、あの人はもう五十でせう！」

「あの人は四十三だつて云つてます。けれど同じ事ですわ。たとへ二十五だつても——私、あの人と結婚しようとは思ひません。さぞ幸福な事ですわよ！ 一週間一緒に居たつて——一度だつて笑ふ事なんぞありやしないんですから。パラモーン・セミョーヌイチは私の恩人です、私、あの人は大變恩があるのです、あの人は私を拾ひ上げて、育てくれました、あの人が居なければ、私、とても浮び上る事は出来なかつたのです、ですから、私、あの人は父親のやうに思はなくはないのです……けど、奥さんになるなんて！ いゝえ、私、死んだ方がましですわ！ 今すぐにお墓にはいつた方がましですわ！」

「何故貴女はそんなに死ぬ事ばかり云ふんです、ムウザ・パーヴロヴナ？」

「まるで生きて居るのがひどくたのしい事のやうですね。貴方のお友達のヴラヂーミル・ニコラーイチだつて、私、たゞあんまり自分がみじめでやるせないから愛するやうになつたんですわ——それにパラモーン・セミョーヌイチはまたあの人で結婚を申し込んで来るし……ブウニン、あの人は詩でこそ困らされるけれど、少しも怖くはありません。あの人は毎晩私が疲れ切つて肩も脱けさうになつて居る時にカラムジーンを読ませなんかしませんからね。それにあの年寄り達が私にとつて一體何だと云ふんでせう？ あの人は私の事を冷いと云ふ、あの人は一緒に居て——誰が温かくれるでせう！ もし何處までも無理を云はうと云ふのなら——私、今でも出て行つてしまひますわ。パラモーン・セミョーヌイチはいつも自由、自由つて云つて居る、さうよ、それなら私だつて自由

が欲しいわ。でなければ——それが何になるでせう？ 他の人には誰にでも自由を與へて、私だけは監獄の中につないで置くと云ふ事になるぢやありませんか。私、自分であの人にさう云ひます。もし貴方が私を裏切るやうな事があつたら、でなくても一言でもそれを洩らすやうな事があつたらよござんすか、私、もう此世ではお目にかゝりませんから！」

彼女は道の眞中に立ちほだかつた。

「此世ではお目にかゝりませんから！」彼女ははげしい聲でくりかへした。彼女はこの度もまた眼をあげようとはしなかつた。彼女は、もし誰かに眼の中を覗かれれば自分が乾度自分自身を裏切つてしまふに相違ない、心の中にかくして居る事をさらけ出してしまふに相違ないと云ふ事を知つて居るかのやうに思はれた……彼女が怒るか悲しむかした場合でなければ眼をあげないのは全くその爲であつた——そして一度眼をあげるとそのまゝ喰ひ入るやうに對手の眼の中を見つめるのであつた……が、彼女の小さい、薔薇色の、愛らしい顔は動かしがたい決心に輝いて居た。

「成程、タールホフの云つた事は本當だ、さうした考へが私の頭に閃いた。「此女は——全く新しいタイプだ。」

「貴女は全然僕を怖がる必要はありません、私はやつと口を開いた。

「本當に？ たとへ、もし……貴方は先刻私達の關係について何かおつしやいましたね……でも、もし……」が彼女は不意に黙つてしまつた。

「さう云つた場合でも全然怖がる必要はありません。ムウザ・パーヴロヴナ。僕は貴女の裁判官で

はありません。貴女の秘密は——此處に埋めておきます。」私は自分の胸を指さした。「僕を信じて下さい、僕には解つて居るつもりです、つまり……」

「貴方、私の手紙を持つてらしつて？」ムウザはだしぬけにたづねた、
「持つてます。」

「何處に？」

「ボケツトの中に。」

「かへして下さい……早く、早く！」

私は昨日の紙片を取り出した。ムウザは小さい硬い手でそれをひつたくつて、暫くの間お禮でも云はうとするものゝやうにちつと私と向ひあつて立つて居た、が、突然びくつとして身のまはりを見廻すと、いきなり頭を下げようともせずにあわてゝ駆け下りて行つた。

私は彼女の駈けて行つた方角を眺めた。塔のすぐ傍にアルマギザにくるまつた（アルマギザは當時大流行であつた）一人の人影が動いて居た。タールホフであつた。

「は、あ、」私は考へた。「君は知つて居たんだな、さうやつて見張つて居る所を見ると……」
そして私は小聲に口笛を吹きながら家の方に歩き出した。

翌朝、やつと茶をのみをへたばかりの所にブウニンが訪ねて来た。彼はひどく困惑したやうな顔付をして部屋の中にはいつて来た。そして丁寧に頭を下げて、身のまはりを見廻しながら、自分の

無作法を詫びはじめた。私はあわて、決してそんな事はないからと云つて彼を慰めた。私と云ふ罪深い人間はブウニンが屹度金を借りるつもりで来たのだらうと想像した。が、彼はたゞ仕合せとサモワールが未だ出て居るやうだから、ラムを入れた茶を一杯飲ませて欲しいと云つただけであつた。「私はかうして貴方に會ひに来るのに妙に氣落ちがして慄へてなりません、」彼は砂糖の小さな碎片を噛みくだきながら云つた。「貴方は怖い事はないが、あのお祖母さんが恐しかつたんです！ それに前にもお話したやうに、やはり此服装がはづかしいんでねえ、」ブウニンはその古ぼけた外套の縁を指てなでて見た。「家ではこれでも何でもない、街路でも何とも思ひはしないけれど、一度黄金の宮殿にはいると——急に自分の貧乏に目の前に立ちはだかれたやうな氣がして——全く困つてしまひますよ！」私は中二階の小さな部屋を二つ占領して居た。勿論宮殿、まして黄金の宮殿などとは考へやうもない粗末な部屋であつた。尤も、ブウニンは祖母の屋敷全體をさして云つたのかも知れなかつた、尤もそれとても決して目に立つほど豪華なものではなかつたけれど。彼は前の晩何故たづねて来なかつたかと云つて私を責めた。「パラモーン・セミョーヌイチも、なに、来るもんかなんて云ひながら、でもやつぱり待つて居ましたよ、それにムウザもお待ちして居たし……」

「え、ムウザ・パーヴロヴナも？」私は訊ねかへした。

「え、あれも。あれは全く可愛いらしい娘でせう、え？」

「え、非常に可愛らしい、」私は彼の言葉に同意した。

「プウニンはびつくりするやうな迅さでその禿げた頭をつるりと一撫でした。「あれは全く美人です、眞珠、いや金剛石かも知れん——これは嘘ぢやない、」彼は私の耳許に口を寄せて来た。「生れも貴族なのです、」彼は囁くやうな聲で云つた。「たゞ、貴方だから云ふが、左翼の方の系統だつた、つまり、禁斷の木實を味はつたのです。両親が死ぬと、親戚のものはみな一様に手をひいてしまつた、そしてあれ一人を運命の大浪の中に、つまり絶望と餓死のたゞ中に投げ出した。その時まるで古代の救世主のやうにして我がパラモーン・セミ・イヌイチがあらはれたのです。彼はあれを拾ひあげて、着物も着せ、ぬくめてもやつた——さうしてあの小さな雛つ子を育てあげた。そして、今やつと我々の喜びは花を開いたのです！ 全く珍しい立派な人物でせう！」

プウニンはどつかりと腕椅子の背に凭りかゝつて両手をあげた、が、すぐにまた前の方に身をかがめると、前よりも更に聲をひそめて囁き出した。「パラモーン・セミ・イヌイチ自身も……未だ御存じなかつたらうか、やはり貴族の出で——左翼系統なのです。人の噂によると——何でも阿父さんはダビデ王の後裔で、有力なジョルジアの諸侯だつたと云ふ……ねえ、どうです——口で云へば簡単だが、實に大したもんぢやありませんか！ ダビデ王の血をひいて居る！ 實に素晴らしいぢやありませんか！ また別にかう云ふ説もあるんです、パラモーン・セミ・イヌイチの祖先は印度のバプール白骨王と云ふ人だつたと云ふんです。これもまた素敵ぢやありませんか、ねえ？」

「ぢや、何ですか、」私は訊ねた。「あの人も、バプリンもやはり、運命の渦の中に投げこまれたわけなんですか？」

プウニンはもう一度禿げた頭を撫でまはした。「さうなんです！ あの小さな別嬪さんに比べるともう一倍残酷なやつに！ ほんの物心地のついた時分から——たゞもう闘ひのほかはなかつたんですね。白状すると、私はルーバンからヒントを得て、そのためにパラモーン・セミ・イヌイチの肖像に捧げる四行詩を一つ作つて居る。一寸待つて下さい……え、と、どうだつて、あ、さうか、

假借なき運命さだめの鞭は襪襪はきより

底知らぬ嘆きの淵にバプリンを逐ひぬ。

さはれ闇きに光照ること、黄金なす輝やくがごと

今ぞ勝利の桂冠は彼が額をかざる！

プウニンは此詩をキチンと調子にあつた歌をうたふやうな聲で、朗讀の規則どほり〇の音を十分に響かして暗誦した。

「それである人は共和主義者になつたんですね、」私は叫んだ。

「いゝえ、その爲ではないのです、」プウニンは靜かに答へた。「あの人は阿父さんの事はもうとうに救して居ます。たゞあの人はいかなる種類の不正にも堪へる事が出来ない、他人の不幸が常にあの人を苦しめてやまないのです！」

私は前の日ムウザから聞いた事——バプリンの求婚の問題の方に話を持つて行かうとした、が、何處から切り出していゝかまるでわからなかつた。プウニン自身が却つて私を此窮境から救ひ出し

てくれた。

「貴方は何も気がつかれませんでしたか？」彼は狡猾さうに眼を細めながら突然云ひ出した。「私共の所へ来られた時、何も特別に？」

「ぢや、何か氣のついていゝやうな事があつたんですか？」私はきゝかへした。

ブウニンは誰か立聴きして居るものはないか、それが氣にかゝるやうに肩越しに後をふりかへつた。「我々の小美人は、ムウゾチカは間もなく奥さんになるのです！」

「え？」

「パブリン夫人になるのです、」ブウニンは緊張した聲で云つた、そして幾度か掌で膝を叩きながら、陶製の支那人形のやうに首をふつて見せた。

「まさか！」私はわざと驚いたふりをして叫んだ。

ブウニンは忽ち首をふるのをやめた、手は凝固したやうに動かなくなつてしまつた。「まさか？何故です、どうしてなのですか？その譯をきかして下さいませんか。」

「何故つて、パラモーン・セミョーヌイテはあの人にはむしろ阿父さんと云つた方がいゝ位ですよ。それにかうした年齢の相違はあらゆる愛情を殺してしまひます——女の人の方ですよ。」

「愛情を殺す？」ブウニンは嚇となつて云ひかへした。「ぢや感謝の念はどうなるんです？純な心は？優しい感情は？愛情を殺してしまふつて！いや、貴方はもう一度考へて見なければいけません。ねえ、今ムウザが最もすぐれた娘だとします、それにしてもパラモーン・セミョーヌイテの

愛を得て、その慰め、支へ——つまり配偶となる、それはあゝ云つた娘にとつてもやはり最高の幸福ぢやないんですか。いや、あれはそれをよく知つて居る！まあ、よく氣をつけて御覽なさい！ムウゾチカはパラモーン・セミョーヌイテの前では正に敬虔そのものです、たゞもう身顛ひばかりして、喜びで一杯になつてます！」

「それがいけないんですよ、ニカーンドル・ヴァギールイテ、貴方の云ふ身顛ひばかりしてると云ふのが、自分の愛してる人の前で身顛ひなぞする者はありませんからね。」

「いや、私はそれにも不同意だ！例へば此私だが、恐らく私以上にパラモーン・セミョーヌイテを愛し得るものはないだらうと思ふ……が、その私があの人の前では身顛ひを感じます。」

「貴方は——そりやまた別な話ですよ。」

「何故別です？何故？何故です？」ブウニンは躍起となつて切り込んで来た。私は全く彼を知らなかつたのだつた。彼はのぼせて、恐しく眞面目になつて、殆んど腹を立てゝ居るやうに見えた——顔を踏む事などはもうすっかり忘れてしまつて居た。「いや、」彼は云つた。「貴方は全然物事の機微を察する眼がない、人の心を讀む事が出来ないのだ！」私は彼にさからふ事をやめた……そして話を他の方面に持つて行くために、一つ昔の思ひ出を生かして何か讀んで見ようではないかと提議した。

ブウニンは一寸の間黙つて居た。

「古い詩人の事ですか？本當の詩人の事ですか？」彼はやつと口を開いた。

「いゝえ、新しいのを。」

「新しいのを？」ブウニンは信じられないと云つたやうにくりかへして云つた。

「えゝ、ブウシキンを、」私は答へた。私は不意にいつい此間タールホフの云つて居た「ジブシイ」のことを思ひ出した。恰度年寄りの亭主をうたつた民謡もはいつて居る……ブウニンは未だ幾分ためらふやうに見えた、が、私は出来るだけ樂に聞けるやうに彼を長椅子に坐らせておいて、到頭ブウシキンの詩を讀み出した。やがて「お年を召した御亭主さん 怒り上戸の御亭主さん」のくだりまで來た。ブウニンはその小唄ををりまで聞いた——と、突然はげしい勢ひで椅子から立上つた。「たまらない、」彼はびつくりするほど深い動搖を見せながら云つた。「御免なさい、私はもうこれ以上その作家のものを聞く事は出来ません。彼は不道德な誹謗者だ、彼は嘔吐きです……私はすつかり氣持をこはされてしまつた！ とてもたまりません！ 今日はおいとまさしていただきます。」

私はブウニンをなだめてもう少し話して行かせようとした。が、彼はまるで白痴な、脅やかされた子供のやうな執拗さで自分の意見を云ひ張つた。幾度かくりかへして、自分は全く氣持をこはされてしまつたやうな氣がするから、外に出て少しでも新鮮な空氣に浴したいのだ、と云つた——さう云ふのに唇は絶えず軽く顫へ、眼は——まるで私に傷つけられてもしたやうに——私の視線を避けて居た。さう云ふ風にして彼は歸つて行つた。

數分の後、私も家を出てタールホフの宿に向つた。

學生流の無雜作で、私は誰にもことわらず、眞直に彼の部屋にはいつて行つた。最初の部屋には誰も居なかつた。私はタールホフの名を呼んで見た、が、返事になかつたのでそのまゝ後へ引返さうとした。と。不意に次の部屋の戸が開いて、私の友人は姿をあらはした。彼は妙にいぶかるやうな眼附で私を見て、黙つて手をにぎつた。私はブウニンから聞いたことをすつかり話してしまはうと思つてやつて來たのであつた。で、すぐ悪い時に來たなとはさとりながらも結局二三の無駄話をしたあとで、ムウザに關するバプリンの考へを彼に打明けた。が、此新しい知らせはどうやら少しも彼を驚かさないうやうに見えた。彼はしづかに椅子に腰をおろすと、ぢつと私の顔に目をそゝいて、やはり黙つたまゝ一種の妙な表情……へえ、それからどんな事を云ひたいんだい？ まあ、云つて見たらいゝぢやないか、とても云ひたさうな表情をして見せた。私はぢつと彼の顔を見つめた……軽く興奮したその顔はやゝ皮肉げに、殆んど高慢さうにさへ見えた。が、それは私の考へを「云つて見る」事をさまたげはしなかつた。むしろその反對であつた。「君はわざとそんな顔をして居るんだね、」私は考へた。「なら、俺も遠慮してはやらないぞ！」で、私はすぐに一時の感情に身をまかせる事の危険さを、他人の自由及びその私的生活を尊敬するのは各人の義務である事を説きはじめた——つまり有益な、必要な忠告をあたへはじめた。さう云ふ事をしやべる間、私は樂に話が出るやうに、縦横に部屋中を歩きまはつた。タールホフは私の言葉を遮らうともせず、椅子に身をうづめたまゝ身動き一つしなかつた。たゞ指先で顔のあたりをいぢつて居るばかりだつた。

「僕は知つて居る。」私は云つた……(何が私をさう云はせたのか、それは私自身にもわからない。恐らくは嫉妬でもあつたらう。少くとも道德の命令にしたがつたのでなかつた事は事實である!)
 「僕は知つて居る。」私は云つた。これは勿論好加減な冗談事ぢやないだらう。僕は君がムウザを愛し、ムウザも君を愛して居る事を——そしてそれが決して君の一時の氣紛れではない事を信じて居る……しかし、君、想像して見給へ! (こゝで私は腕を十字に組んだ)……假に君が君の情熱を満足させたと思像して、さてその次はどうなるんだ? 恐らく君はあの人とは結婚しやすまい。そして同時に君は一個の善良な、正直な人物、あの人の恩人の幸福を破壊する事となる、それに……おそろくは……(こゝで私の顔は鋭さと悲しみを同時にあらはして見せた)あるひはあの人自身の幸福をも破壊する事になりはしないか……」

それから曰く何、曰く何……

ほとんど十五分も私の説教はつゞいた。タールホフはやはり黙つたまゝであつた。私はこの沈黙に面喰ひはじめた。私は時々彼の顔を見やつた、私の言葉が彼にあつた印象をたしかめる、と云ふよりもむしろ彼が何故抗辯もせず、同意もせず、まるで啞のやうに黙りこんで居るのか、そのわけが知りたかつたからであつた。やがて私は彼の顔の中に或る變化……たしかに或る變化の起りつつあるのに氣がついた。不安と動搖、苦しげな動搖の色があらはれかけて居るのであつた……が、不思議な事には、最初タールホフを見た時に驚かされたあの興奮した、明るい、皮肉な表情はやはりその思ひみだれた、苦しげな顔附の間にも残つて居た! 私は自分の説教の成功を祝つていゝの

か悪いのかまるでわからなかつた、と、タールホフは突然立上つて、しつかりと私の両手を握りしめながら、早口に云ひはじめた。「有難う、ありがたう。君の云ふのは無論正しいんだ……けど、また一方から見れば、かう云へない事もないぢやないか……つまり君のしきりに賞めるバプリンが果して何者だらう? 正直な馬鹿者——ただそれだけぢやないか! 君はあれを共和主義者だつて云ふ——が、彼はたゞしかめ面をして氣取つて居るだけなんだ! さうだ、それが彼奴の正體なんだよ! 彼の共和主義とは、つまり彼が何處へ行つてもうまくやつていけないと云ふ事その事なんだよ。」

「君はさう思ふのか! しかめつ面をして何處へ行つてもうまく行かない! しかし、君、私は不意に熱して云ひつゞけた。「しかし、ウラジーミル・ニコライイチ、今の世では何處へ行つてもうまく行かないと云ふことそのことが——却つて善良な、高尚な性質の證據ぢやないのか? たゞ馬鹿者だけが、悪人だけが——何處へ行つてもうまく立ち廻つて、みんなと妥協して行くんだよ! 君はバプリンを正直な馬鹿者だつて云ふ! ちや、何かい、不正直な恫巧者の方がいゝつて云ふのかい?」

「君は僕の云つた事をすつかり曲げて居る!」タールホフは叫んだ。「僕はたゞ僕があの人物をどんな風に解釋して居るか、それを云ひたかつただけだ。君は——本當にあれをそんなに稀な人物だと思つてるのかい? 決して、決して、だ! 僕はあんな人間には幾人も出會つた——何かやかましい容子をして、悪く黙りこくつて、強情に四角張つて居る奴がある……おゝ、おゝ、君達は云ふ、

あの人の中には屹度多くのものがあるにちがひない！ 所が何にもありやしないんだ、奴等の頭の中にあるのは只一つの考へきりさ——自分の威厳を損じまいと云ふ……」

「それだけでも——矢張り尊敬すべき事だよ、私は口をはさんだ。「しかし、君は何時の間にそんなに彼を研究する事が出来たんだ？ 君はあの人の事なんか知つてやしないんだらう？ それともムウザの言葉をきいて……そんな考へを作りあげたのか？」

タールホフは肩をそびやかした。「僕とムウザとは……あの男の話なんぞしやしないよ。まあ、ききたまへ、」彼はいら／＼したやうに身體中を揺ぶりながら云ひつゞけた。「これは君に云ふがね、もしバプリンがそんなに優れた、正直な性格ならば、何故ムウザが——到底彼の妻ではありえない事に気がつかないんだらう？ これは二つの中のとつちかだぜ、彼が自分の彼女に對する行爲が謝思の名を借りた一種の強制である事を知つて居るか……もし知つて居るとすれば彼の正直はどらするんだ？ 或はそれを知らないのか……それならばやつぱり馬鹿者と云ふよりほかはないぢやないん？」

私は云ひかへさうとした——が、タールホフは再び私の両手をつかんで、例のせきこんだ調子で云ひ出した。「しかし……無論……僕は君の正しい事を、千倍も正しい事を知つてるよ……君は僕の本當の友達だ……けど、今は、お願ひだから僕の事は放つといってくれたまへ。」

私は思はずま／＼した。「君を放つておけつて？」

「うん。僕は君の云つた事をよく考へ直して見なければならん……そりや、僕は君の正しい事は

疑はないよ……けど、今は放つといってくれたまへ。」

「君はひどく興奮して居る……」私は云ひかけた。

「興奮して居る？ 僕が？」 タールホフは笑つた。が、すぐにまたもとの眞顔にかへつた。「勿論だ。これが興奮せずに居られるもんか？ 冗談事ぢやないつて、君自身さう云つたぢやないか？」

さうだ、僕は考へて見なくちやならん……僕だけで。」彼はやはり私の手をにぎりしめたまへて云つた。「左様なら、君、左様なら！」

「左様なら、」私も對手の言葉をくりかへした。「左様なら！」扉口を出ようとして私はタールホフに最後の一瞥を投げた。彼はむしろ喜んで居るものゝやうに見えた。何を喜んで居たのか？ 私が眞實の友人として、仲間として、彼の踏みこんだ道の危険さを教へてやつた事をか、それとも單に私が歸らうとして居る事をか？ 色々な考へがその日一日夕方になるまで——夕方になつて私がパウニンとバプリンの借りて居る家の閤をまたぐその瞬間まで私の頭の中に渦まいて居た（私はその日の中に彼等の所を訪ねたのであつた）私は白状しなければならぬ、タールホフの云つた或る言葉は深く私の心を打つた……私の耳の中に鳴つて居た……バプリンは本當に……彼は本當に彼女が彼の妻として不適當である事がわからないのだらうか？

いや、そんな事はないだらう！ バプリン、自己犠牲の念に富んだバプリン——あの正直な馬鹿者のことだもの！！

ブウニンは私の所へ訪ねて来た時、前の晩はみんなが私を待つて居たと云つた。恐らくそれは本當だつたらう。が、此日は明らかに誰も私を待つて居ない事が明白であつた……彼等は三人とも家に居た、そして三人とも私の訪問が意外らしかつた。パブリンもブウニンも——二人とも身體の具合が悪かつた。ブウニンは頭痛がすると云つて、眞丸くなつて暖爐の上の臥床に寝て居た、玉環様の手巾で頭を縛つて、兩の額額には胡瓜の片を貼つて居た。パブリンは黄痘であつた。すつかり黄色く、殆んど褐色になつて、眼のふちには黒い輪が出来、額には深い皺がよつて、鬚も剃つてなかつた——どう見ても花弁と云ふ容子ではなかつた！ 私は歸らうとした……が、彼等は私を放さなかつた、お茶さへ出してくれた。私は到頭一晚その不愉快な空氣の中に過した。ムウザは何處も悪い所はなかつた、いつもの内氣ささへなくなつて居るやうに見えた、が、彼女は明らかに何事かを怒つて居るやうにひどく機嫌が悪かつた……到頭彼女は辛抱しきれなくなつた——そして私に茶のコップを渡しながら早口にさゝやいた。「貴方なんぞが何を云つたつて、何をしたつて、もうどうにもなりませんよ……どうなるもんですか！」私はびつくりして彼女を見た、そして適當な機會を見て、やはり小聲で訊ねかへした。「そりや、どう云ふ意味ですか？」「それはね、」彼女は答へた、その眞黒な眼は、瞬間憎惡に輝きながらきつくひそめた眉の下から私の顔に注がれたかと思ふと、またすぐに傍に外れてしまつた。「私、今日貴方が彼處で云つた事をすつかりきゝました、あれぢやとてもお禮は申上られませんか、けど、物事は決して貴方なぞの思ふやうに行きませんからね。」「貴女、彼處に居たんですね、」私は思はず大聲を出した……パブリンはそれに氣がついてじろりと

私達の方を見てよこした。ムウザは私の傍をはなれた。

十分ほどたつと、彼女はまた私の傍にやつて来た。彼女は私に向つて大膽な、危険な事を云ふのを、それを自分の保護者の前で、その眼の見張つて居る下で、わづかにその疑ひをまぬかれる程度の用心をしながら云ふのを、ひどく愉快がつて居るやうだつた。絶壁の上を、深淵の縁を歩くのは——女の此上ない娛樂なのだ……「え、私、彼處に居ましたわ、」ムウザは顔色も變へずに喋いた、たゞ小鼻のあたりが軽くふるへて、肩がびく／＼とひきつて居た。「さうよ、でももしバラモーン・セミョーヌイチが貴方と何を話して居たつてきいたら、私、すぐにあの人に云つてやるわ。かまふもんですか！」

「お氣をつけなさい、」私は云つた。「あの人は氣がついて居るやうですよ……」

「私、何時だつて云つてやるわ。それに、氣なんぞついて居るもんですか。一人は鴨の子のやうに床の上から頸をのぼして居るだけで何も聞えやしないし、も一人はすつかり哲學に氣をとられてしまつて居るわ。何の怖い事があるもんですか！」ムウザの聲はやゝ高くなつて来た、そしてその頬は云ひ知れぬ毒氣を含んだ暗い紅味を帯びはじめた。それは全く不思議なほどよく彼女に似合つた。私はまだその時ほど美しい彼女を見た事がなかつた。卓子を片附けたり、茶碗や皿を置き並べたり、彼女は身輕に部屋中を動きまはつた。その身輕な、氣儘な動作の中には何かしら挑戦的なものが含まれて居た。「何とでもお好きなやうに批評して下さい。が、私は自分の思つた通りの事を致しません。貴方なんぞちつとも怖くはありません。」

私はその晩ムウザが恐しく蠱惑的に見えた事をかくす事が出来ない。さうだ、私は考へた、此女は毒を持つて居る——これは全く新しいタイプだ……實に素敵だ。あの手は確に人を打つ事を知つて居る……が、それが何だ！ それはそれで構はないぢやないか！

「バラモーン・セミョースイチ！」不意に彼女は叫んだ。「共和國と云ふのは——誰でも自分の好きなどほりに出来る帝國ですか？」

「共和國は帝國ぢやない、バブリンは頭をあげて肩をひそめながら答へた。「それは一切のものを律法と正義の基礎の上におく——一つの社會制度です。」

「ぢや、ムウザは追つかけて云つた。「共和國ぢや誰でも他の人を強制する事は出来ないんですね？」

「出来ません。」

「自分の事は誰でも自分で自由に出来るんですね？」

「さうです。」

「さうですか。私、それをお聞きしたかつたんです。」

「何の爲に——そんな事が聞きたいんですか？」

「いゝえ、たゞ——たゞ貴方のお口からそれを伺ひたかつたんです。」

「我々のお嬢さんは學問好きで居らせられるて、」ブウニンが臥床の上から云つた。
私が廊下に出ると、ムウザが後について來た。勿論禮儀のためではなくて例の惡意からだつた。

私は別れ際に彼女に訊ねた。「貴女は本當にそんなにあれを愛して居られるんですか？」

「愛しようと、愛すまいと、それは私だけの事です、」彼女は答へた。「なるやうになるばかりですわ。」

「お氣をつけなさい、そして火弄ひいたらはおやめなさい……火傷をしますよ。」

「凍えるよりは火傷した方がましですわ、貴方は……一體何だつてそんな事ばかり云ふんです！」

それに貴方はどうしてあの人が私と結婚しないと知つたんです！ どうして私がそんなに結婚したがつてると知つたんです？ 私の身がどうならうと……それが貴方に何の關係があるんです？」

彼女は私の後にはげしく扉をたてた。

私はその歸り路、或る喜びを以て考へた事をおぼえて居る——自分の友人、ウラヂーミル・タールホフが此「新しいタイプ」の爲に少からず手を焼くであらう事を……その幸福の爲には少くとも何程かの値を拂はなければならぬだらう事を！

しかし彼が遂にその幸福を得るであらう事は、遺憾ながら疑ふ事が出来なかつた。

二三日たつた。私は自分の部屋の机に坐つて、勉強と云ふよりもむしろ朝飯を喰へに行く仕度をして居た……ふと微かな物音が聞えたやうな氣がして私は頭をあげた、そしてそのまゝ石のやうに硬くなつてしまつた。白墨のやうに白い、恐しい顔をした幽霊が——身動きもせず眼の前に立つて居た……ブウニンであつた。彼の半眼に開いた眼はものうげにまたゝきながら私の顔の上に注が

れて居た、その中に浮んで居るものはたゞまるで理性を失つた、追ひつめられた兎のそれにも似た恐怖ばかりであつた。そして兩の腕はまるで棒のやうに力なく垂れさがつて居た。

「ニカーンドル・ヴァーグールイチ！ どうしたんです？ どう云ふ風にしてこゝまで來ました？ 誰も気がつかなくつたんですか？ 一體何事が起つたんです？ え、どうしたんです？」

「逃げてしまつた、」ブウニンは殆んど聞えるか聞えないかのかすれ聲で云つた。

「何ですつて？」

「あれは逃げてしまつた、」彼はくりかへした。

「誰がです？」

「ムウザがです。夜の中に家を出て、置手紙を残して行つた。」

「置手紙を？」

「さう。貴方がたの事を有難いとは思つて居ます、けれど二度と家には歸りません。どうか捜さうとしないで下さいまし、さう書いてあつた。私達は家中駈廻りました。料理女に訊ねたけれど、やはり何も知つては居ないので。御免なさい、私、もう聲が出ません。咽喉がつかれてしまつた。」

「ムウザ・パーヴロヴナが家出をしたんですつて！」私は叫んだ。「嘘ぢやないんですか！ バブリン君はさぞ失望して居られるでせう。あの人はどうする積りですか？」

「どうする積りもないのです。私は總督の所へ駈けつけようと思つてしまつたが、あの人はとめました。警察に報告しようとしたら、それもとめました。そして私の事を怒りさへもしました。あれは自由

だ。俺はあれを束縛したくない、あの人はさう云ふんです。そしていつものやうに勤めに出掛けてさへ行きました。けれど、まるで生きた人の色はありませんでした。あの人はそりやひどくあれを愛してたんです……我々は二人ともあれを愛してたんです！」

ブウニンは今になつて始めて彼もまた決して一個の木偶ではなくて、やはり生きた人間である事を暴露した。彼は兩の拳を高くふりあげて、それを象牙のやうに光る頭顱の上に打ちおろした。

「恩知らずめ！」彼は叫んだ。「お前に飲み喰ひさせたのは誰だ。お前に着物を着せ、お前を育てあげたのは誰だ。身も魂も打込んでお前のために心配したのは誰だ……それをお前はすっかり忘れてしまつた！ 私を棄てるのは勿論何でもなし、しかし、バラモーン・セミョーヌイチ、バラモーン……」

私は彼に腰をおろして少し身體を休めるやうにすゝめた……

ブウニンは頭を横に振つた。「いゝえ、大丈夫です。私が貴方の所へ來たのは……いや、何の爲に貴方の所へ來たのか、私にはわかりません。私は馬鹿になつてしまつたやうだ。一人で家に居るのが——私には恐ろしい。私は自分をどうあつかつたらいいのだ？ 部屋の中に入れて、眼をふさいで呼んで見る、ムウザ、ムウザテカ！ 人間はかう云ふ風にして氣が狂つて行くのだ。が、私は何をおしやべりして居るのだ？ 私は自分の此處に來たわけがわかりました。貴方は此間私に呪つても呪ひ足りない唄を讀んで聞かせましたね……年寄りの亭主の話のある……貴方は何の爲にあゝ云ふ事をしたんです？ 貴方はあの時何か知つて居たんですか……何か察して居たんですか？」

ウニンは私の顔を見詰めた。「どうか、ピートル・ベトロギッチ、彼は不意に叫んで、いきなり身體中ガタ／＼とふるへ出した。「貴方はあれの居る所を知ってるんでせう？　ねえ、あれは一體誰の所に逃げて行つたんです？」

私はどぎまぎして、思はず眼を落した……

「あの女は何か手紙の中に書いて行つたでせう、」私は云ひかけた。

「あれは誰か他の人を愛してるから行つてしまふと云ふんです！　ねえ、貴方、お願ひだから、貴方は本當にあれが何處に居るか知ってるんでせう？　あれを救つて下さい、一緒にあれの所へ行きませう。あれを説きつけませう。考へて見て下さい、あれがどう云ふ人物を亡ぼさうとして居るのか！」ブウニンは突然眞紅になつた、身體中の血が頭に上つて來たのだつた。彼は苦しげに床に膝まづいた。「あれを救つて下さい、どうか、あれの所へ行きませう！」

給仕が扉口にあらはれて、そのまま呆れ顔につつ立つて居た。

ブウニンを再び立上らせて、たとへ私が何事かを感づいて居るにもせよ、とにかく倉卒に、殊に二人一緒に行動するのは絶対に不利益だと云ふ事をのみこませるには全く一通りの骨折りはなかつた。私はそれがたとへ事をこはしてしまふばかりだと云つた。私は出来るだけの事はして見る、たとへ結果については何とも云ふ事が出来ないと言つた。ブウニンはもうさからはなかつた、私の云ふ事を聞いても居なかつた、たとへ時々例の上ずつた聲で「救つて下さい、あれとバラモーン・セミョーヌイチを救つて下さい、」とくりかへすばかりであつた。そしてしまひには到頭泣き出してしま

つた。「一言、一言でいゝからこれだけは教へて下さい、」彼は哀願した。「その人は綺麗な人ですか？　若い人ですか？」

「え、若い人です、」私は答へた。

「若い、」涙に頬を汚しながらブウニンはくりかへした。「そしてあれも若い……不幸のもととはそれだわい！」

最後の二句に韻を踏んだのはたゞ偶然の事だつた。可哀さうなブウニンは全く詩どころではなかつた。もしも再び彼の雄辯が聞かれるならば、否、あの音のない笑ひなりと聞くことが出来るならば、その爲には私は大抵の物なら惜みはしなかつたらう……けれど、彼の雄辯は永久に失はれてしまつた——私は二度とその笑ひを聞かなかつた。

私は何か確な事を掴んだならば直ぐに知らせようと約束した。……が、タールホフの名は口に出さなかつた。ブウニンは急にすつかり氣落ちがしてしまつた。「どうぞ、どうぞ、有難う、彼は世にも哀れた顔附をして、今迄決して口にした事のない妙にへりくだつた口調で云つた。「たゞ、氣をつけて、バラモーン・セミョーヌイチには何も云はないで下さいまし……でない、あの人は腹を立てます！　あの人はそれを禁じて居るのです！　ちや、左様なら、御機嫌よう！」

いよ／＼立上つて私の方に背を向けたとき、ブウニンは全く我ながら驚いたほどみじめな、弱々しいものに見えた。彼は兩足とも力なく跛をひいて、その一足ごとに前にのめりかゝるやうにして居た……

「困つた事だ！ この人ももうロリス（ロリス）なのだ、」私は考へた。

私はブウニンにムウザの動靜を探るやうに約束はしたものの、その日タールホフの宿に出掛けたときそこで何か聞き出し得ようとは全然豫期して居なかつた。家には居ようとも思はなかつたし、居たところでどうせことわられるだらうと思つて居たからであつた。が、私の豫想は誤つて居た。タールホフは家に居て、私をむかへた。そして私は知りたいと思ふ事を全部知る事が出来た。が、それは結局何にもならない事だつた。タールホフは、私が彼の部屋の鬨をまたくや否や、決然とした態度で足早に歩みよつて来て、いつもよりも美しく、明るく見える顔に情熱的な兩眼を輝かしながらしつかりとした活潑な口調で云つた。「いゝかい、ペーチャ、僕には君が何の爲に來たのか、何を云はうとして居るのかちやんとわかつて居る。が、僕はその前に云つとくよ、もし君が一言でも彼女について、彼女の行動について、それから君の所謂理性の命令と云ふ奴について云つたならば——僕等はまだそれつきり友人ぢやないよ、たゞの知合ひでもないよ、赤の他人になつてもらふよりほかないよ。」

私はタールホフの容子を眺めた。彼は張りつめた絃のやうに身體の底からふるへて居た、高鳴つて居た。彼は漲り溢れて來る青春の血潮を辛うじておさへて居るのだつた。強烈な、狂喜的な幸福が彼の魂のなかにおしいつて來てすつかり彼をとらへてしまつて居た——そして彼もまたしつかりとそれをとらへて居た。

「それが君の最後の決心かい？」私は力なく云つた。

「さうだ、君、ペーチャ、最後の決心だ。」

「それならば、僕もやつぱり、さやうならと云ふきりだ。」

タールホフはかすかに眉をひそめた……彼はたゞもう幸福だつたのだ。

「さやうなら、ペーチャ、」彼はやゝ鼻にかゝつた聲で云つた、はれやかに微笑しながら、そして

快よげに眞白な、美しい齒なみをかゞやかしながら。

私はどうしたらよかつたらうか？ 私はたゞ彼を彼の「幸福」に任したゞけてあつた。

私が背後に扉を閉ぢたとき、部屋の向う側の扉も同じくピシヤンと閉つた——私ははつきりとそれを聞いた。

私は翌日再び重い心を抱いて自分の不幸な知人達に會ひに行つた。私は心ひそかに——何と云ふ人間の弱さなのだ！——彼等が家に居ない事を祈つて居た、が、私は此度もまた間違つて居た。彼等は二人とも家に居た。この三日の間に彼等の上につつた變化には恐らく何人も眼を見はつたにちがひない。ブウニンはすつかり蒼白く膨れ上つて居た。あのお饒舌は一體何處へ行つてしまつたのか——彼はたゞ例のかすれ聲でぶつ／＼と力なくつぶやくばかりであつた。顔はまるでものにおびえてもしたものゝやうにぼんやりとしまりを失つて見えた。パブリンは、反對に、すつかり皺だらけになつて一層黝ずんで居た。不斷から無口であつたのが、今はたゞきれ／＼の音を出すことさへ



稀であつた。石のやうに冷徹な表情がそのまゝ彼の顔に刻みついてしまつて居た。

私は黙つて居る事が出来ないやうな気がした。が、何の云ふ事があつたらう？ 私はたゞブウコンにかう驛いただけであつた。「何の手掛りもありませんでした。そして私のたゞ一つの忠告は、あらゆる希望をお棄てなさいと云ふ事です。」ブウニンは脹れ上つた小さな赤い眼——彼の顔に残つたたゞ一つの赤いもの——でちらと私の顔を見て、何やらはつきりは聞き取れぬ事々つぷやくとそのまゝよろ／＼と部屋の隅に退いてしまつた。バブリンは私がブウニンに何を話して居たかを推察したのであらう、膠ではりつけてもしたやうにきつく結んだ口を開いて、ゆつくりとした重々しい聲で云つた。「貴方が此前來られて後、私どもに或る不愉快な事が起りました。私どもの養女、ムウザ・パーヴロウナ・キノグラードワが此上私どもと一緒に暮したくないと考へて、家出をする決心をしたのです、そしてその由を置手紙して行きました。私どもは彼女の行爲を禁める権利があるとは思はれませんので、萬事彼女の決心のまゝにまかせる事に致しました。私どもは今はたゞ彼女の幸福を祈るだけです、」彼は苦しげにつけくはへた。「で、折入つてお願ひ致しますが、どうか此問題については何事も黙つて居て下さるやうに。今更とやかく云ふのは無用でもあり、また苦痛でもありませんから。」

「此男もまたタールホフ同様にムウザの話をするのを禁ずるのだ、」私は考へた、そして内心やゝ驚かすには居られなかつた。ヅェートノーンを高く評價して居たのも成程嘘ではなかつたのだ。私は此賢人について何か彼に云つて見ようと思つた、が、舌が動かかなかつた——そして、その方がよかつた。

つた。

私は間もなく家にかへつた。別れるとき、ブウニンも、「ではまた、」とは云はなかつた、二人とも聲をそろへて「さやうなら、」と云つたきりであつた。ブウニンは此前私の持つて来てやつた「レグラーフ」の一卷をかへしてよこしさへした、もう、かう云つたものには用はない、と云ふ意味だつた……

一週間たつて私は不思議な邂逅をした。季節はづれの春があわたゞしくやつて来て、日中には暑さが十八度までのぼつた。一切のものが緑に變つて、軽い、濕ひをふくんだ大地からすく／＼と萌え上つて居た。私は馬術練習所で馬をかりて、雀ヶ丘に遠乗りに出掛けた。途中、私は耳のあたりまで泥を跳ね上げた、尻尾を編み、額毛や鬣に眞紅なりポンを結んだ二頭の逸り切つた若駒にひかせた輕馬車に出會つた。馬具にはまるで遊獵者がするやうな青銅の圓板や飾房がつけてあつた。馬を馭して居るのは未だ若い、青い袖無外套に黄縞の絹襪衣、頂きに孔雀の羽をさした低い氈帽と云ふ扮装のしやれた若者であつた。彼の傍には下町風の、お店勤めでもするらしい玉模様のある紋織の短衣を着て、大きな空色のシヨオルを頭にまいた一人の娘が坐つて居た——彼女は喜びの色にあふれて居た。馭者も同じやうに微笑して居た。私は自分の馬を道ばたに片寄せた、が、矢のやうに走りすぎるその幸福な二人に特別な注意を向けようとしなかつた——と、不意にその若い馭者が自分の馬に向つて聲をかけた……「タールホフの聲であつた！ 私は振り向いた……たしかにさうであつた、彼であつた。疑ひもなく彼が馭者風にいてたつて居るのだつた、とすれば彼の傍に居たの

は——勿論ムウザではなかつたか、

が、その瞬間彼等の若駒は急に足並をはやめた、そしてまた、く中に見えなくなつてしまつた。私は彼等に追いつかうとして自分の馬に跑をいれた。が、それは一足毎に所謂將軍様の御容態をつくる練習用の老馬で、跑になつても殆んど他の馬の速足ほど出なかつた。

「まあ十分に楽しみたまへ、親愛なる人達よ、」私は口の中で呟いた。私はその後の一週間二三度タールホフを訊ねたけれど、しかし一度も彼に會へなかつた事を云つて置かなければならない。彼は家に居たことがなかつた。パブリンにもブウニンにもやはり會はなかつた……私は彼等を訪ねようとしなかつた。

私は風邪をひいて家にかへつた、その日は温かではあつたけれど、風が冷たかつたのであつた。私はほとんど危篤におちいつた——そして恢復すると、醫者の勧めで「新鮮な糧米を取るために」祖母と一緒に田舎にかへつた。私は二度とモスクワにはもどらなかつた。秋になつて、私はペテルブルクの大學にうつつたのであつた。

3

——一八四九年——

今度は七年ではなく、まる十二年と云ふ月日が過ぎ去つた、私は三十一歳であつた。祖母はとう

の昔になくなつて居た。私は内務省に勤務して、ペテルブルクに住んで居た。タールホフは私の視界から消えてしまつた。彼は軍隊勤務に入つて、殆んど田舎まはりばかりして居た。私達は二度ばかり出遭つて、互ひに舊友との再會を喜んだ。が、私達の話は一度も過去のことにはふれなかつた。二度目に會つた時には、彼はたしかもう妻帯して居た筈であつた。或る夏の暑い日、私は自分をペテルブルクにひきとめておく役所の勤務や、街の炎熱や悪臭や塵埃を呪ひながら、ぶらぶらとガローホヰヤ街を歩いて居た。一つの葬列が私の行手をさへぎつた。葬列とは云つても唯一つの馬車、それももう壞れかゝつた柩車だけで、その上に凸凹の激しい舗道の上を揺られて、擦り切れた黒羅紗に半ばまで覆はれた貧しい木造の棺が一つ揺れ動いて居た。白髪の老人が一人、柩車について歩いて居た。

私は彼の顔をのぞいた……見覚えのある顔であつた……彼もまた眼をあげて私を見た……パブリンであつた！

私は帽子を脱つて、彼に近づいて、自分の名を名乗つた——そして彼と並んで歩き出した。

「どなたのお葬式ですか？」私は訊ねた。

「ニカインドル・ヴァギールイチ・ブウニンのです、」彼は答へた。

彼がこの名を云ふだらうとは自分でも豫感して居た、知つて居た。それでもやはり私の心ははげしく動いた。私は惘鬱を感じた、同時にまた偶然に自分の舊師に對して最後の義務を果す機會を得た事を喜んだ……

「御一緒に行つてもよござんすか、バラモーン・セミョーヌイチ？」
 「どうぞ……會葬者は私一人です、貴方で二人になるわけです。」

私達は一時間以上も歩いた。私の伴侶は眼も上げず、唇も開かずにとど黙々として歩いて居た。此前會つた時から見ると、彼はもうすつかり老けてしまつて居た。深い皺の刻んだ、青銅色の顔は眞白な髪と鋭い對照をなして居た。勞働と忍苦の生活、絶えざる苦闘の痕はバプリンの存在のあらゆる部分に見る事が出来た。窮乏と貧苦とは深く彼の身内に喰ひ込んで居るのだつた。一切の事がをはつた時、曾てブウニンであつたものがスモレンスコエ墓地のじめ／＼した……さうだ、あのじめじめした土の中に永久にかくれてしまつたとき、バプリンは帽子を脱つたまま二分ばかりその新しく盛られた砂利まじりの土饅頭の前に低く頭を垂れて居たが、やがてその疲れ切つた、まるであらゆる感情をなくしてしまつたやうな顔を——乾からびた、落ち窪んだ眼を私の方に向けて、惘鬱な聲で禮をのべた。そしてそのまゝ向うに歩み去りかけた。私は彼をひきとめた。

「貴方は何處にお住ひですか、バラモーン・セミョーヌイチ？ 私、是非お訊ねしたいと思ひます。貴方がベテルブルクに居られようとは全く思ひがけませんでした。御一緒に昔の事を思ひ出したり、亡くなつた友達の事を話し合つたりして見たいと思ひます。」

バプリンはすぐには答へなかつた。

「私がベテルブルクに來たのは二年前です、」彼は暫くしてからやつと口を開いた。「私は街の、ほんの場末に住んどります。しかし、もし本當に訪ねて下さる思し召しなら、どうぞおいて下さ

い、」彼は自分の住所を教へた。「夜分において下さい。夜分なら、私ども……二人ともいつも在宅ですから。」

「……お二人とも？」

「私は結婚しました。妻は今朝身體の具合が悪かつたので、此處に來る事が出来なかつたのです。尤も此空虚な形式——禮式を施行するのは一人で澤山ですがね。こんな事を誰が信ずるもんか！」
 バプリンのこの最後の言葉は私にはいさゝか意外だつた。が、私は何も云はなかつた。私は馬車を呼んで、バプリンを家まで送らせようとした、が、彼はそれをことわつた。

その日の夕方、私は彼の住居をたづねた。途中、私はたゞブウニンの事ばかり思ひつゞけて居た。私は自分をはじめて彼に會つた時の事を、その當時彼がどんなに喜んで居たか、そしてどんなに面白い人物であつたかを思ひ出した。それからモスクワで會つた時分——特に私達が最後に會つた時には彼がどんなに氣が折れて居たかを思ひ出した。そして、今、彼は人生に對して最後の決算をすましたのであつた——思へば、人生と云ふものは決して慈悲深いものではなかつたのである！ バプリンはウイボルクスカヤ區の、あのモスクワの巢を思ひ出させるやうな小さな家に住んで居た。ただベテルブルクの巢はほとんどモスクワのそれよりも貧しいものだつた。私が部屋の中にはいつて行つたとき彼は兩手を膝の上に重ねて隅の方の椅子に腰掛けて居た。もう殆んど燃えつきた獸脂の蠟燭がぼんやりとその低く垂れた白い頭を照し出して居た。彼は私の足音をきくと、ハツとして

立上つた。そして私が豫期して居たよりはずつと好意を以て私をむかへた。待つ程もなく彼の妻君がはいつて来た。私はすぐにそれがムウザであるのを知つた——そしてその時はじめてバプリンが私を家に請じたわけをさつた——彼は自分が到頭その求めるものを手に入れた事を私に見せたかつたのであつた。

ムウザはすつかり變つて居た——顔も、聲も、態度も。が、何よりも變つたものはその眼であつた。むかしはその意地悪い、美しい眼はまるできかぬ子のやうに跳ねまはつて居た。ひそやかに、しかしはつきりと輝いて居た、そしてその眼は針のやうに人を刺したものであつた……が、その眼は今真直に、靜かに、ちつと落着いて人を眺めた。眞黒な瞳はすつかりその輝きを失つて居た。「私は打碎かれました。おとなしくなりました。善良になりました。」その靜かな、暗い眼はさう云つて居るやうに見えた。絶えず口許に浮んで居るつゝまじやかな微笑もまた同じことを語つて居た。着物までがつゝまじやかなものだつた。それは小さな斑白のある鳶色の表衣だつた。彼女は先づ私の所にやつて来て、私に自分がわかるか、とたづねた。彼女は少しも面目ながつて居るやうな所がなかつた。羞恥心や過去の記憶を失つたためではなく、たゞつまらぬ物煩ひをしないやうになつたのであつた。ムウザは失くなつたブウニンについて色々な事を話して聞かせた——その聲もまた以前の熱を失つてすつかりおとなしくなつて居た。私は晩年彼がすつかり弱々しく、まるで子供のやうになつて、持つて遊ぶ玩具かかないと寂しがりさへしたと云ふことを知つた。彼等は彼に襤褸切れて玩具を作つて賣つたらよからうとすゝめた……が、彼は自分でそれを持つて遊んだので

あつた。詩歌に對する情熱だけは、しかし、最後まで消え失せなかつた。そして他の一切のものに對して失はれた彼の記憶もたゞ詩歌に對してだけは死ぬまで残つて居た。死ぬ二三日前まで彼はなほ「ラシアード」の或る章を口吟んで居た、が、ブウシキンは、まるで子供が妖怪を怖がるやうに怖がつて居た。彼のバプリンに對する傾倒もまた少しも減じなかつた。彼は以前のとはり彼を崇拜して居た。そしてすでに死の闇黒と冷氣に捉へられた最後の瞬間にすら、なほ硬ばつた舌で「恩人よ！」とつぶやいた。私はまたムウザの口から——あのモスクワの挿話の後間もなく、バプリンが再びロシヤ中を轉々しながらその事務員勤めをくりかへさなければならなかつた、と云ふことを知つた。そしてペテルブルクでもやはり同じやうな勤めを見つけたのであつたが、それも備ひ主との不和から、つい二三日前にその地位を奪はれたばかりなのであつた。バプリンは職工達の味方についたのであつた……話に伴うてムウザの口許をはなれないかすかな微笑は私をたまらなく遺瀾な思ひに誘つた、それは彼女の夫の外貌があたへる印象を更に裏書するものであつた。兩人ともかつが口を糊するだけでもむづかしい——それは疑ふ餘地もなかつた。彼は殆んど私達の談話には加はらなかつた。悲しんで居ると云ふよりは、むしろ何か氣にかゝる事があると云つた容子だつた……何物か明らかに彼の心を嚙んで居るのだつた。

「バラモーン・セミョーヌイチ、ちよつといらして下さい、」料理女が不意に扉口にあらはれて云つた。

「何だ、何か用か？」彼は落着かぬ容子でたづねかへした。

「ちよつといらして下さい。」料理女は意味ありげにしつこくくりかへした。バプリンは上衣のボタンを掛けて出て行つた。

二人きりになると、ムウザはやゝ變つた眼附になつて物を云ふ口調まで變へた。以前の微笑はもう何處にも見られなかつた。「ピートル・ペトロキッチ、私、貴方が今私の事をどう思つて居られるかは存じませんが、しかし、私が以前どんな風だつたかは屹度おぼえて居られるでせう……私、自信屋で、我儘で……そして善くない人間でした、たゞ自分の楽しみのためにだけ生きて居る人間でした。けど、今この事だけは聞いて頂きたいと思ひます、私が棄てられて、氣拔けしたやうになつて、神様がお引取り下さるか、それとも自分から此世を棄てる氣になるか、たゞさうなるときの来るのだけを待つて居ましたとき、私はあのワローニエシでと同じやうに、今一度パラモーン・セミーヌイチに出合ひました——そしてあの人は今一度私を救ひ上げて呉れました……あの人は私を傷つけるやうな事は一言も云ひませんでした、非難するやうな口もききませんでした。あの人は私に何事も要求しなかつた——私はそれに値しなかつたのです。けど、あの人はやはり私を愛して居ました……そして、私はあの人と結婚致しました。他にどうしやうがあつたでせう？ 私——死ぬことも出来ず……思ふやうに生きる事も出来ませんでした……私、本當にどうすればよかつたでせう？ けど——これもお慈悲なのかも知れませんわ。たゞそれだけ。」

彼女は云ひさして一寸の間顔をそむけた。以前のつゝまじやかな微笑が再びその口許に復つて來

た。「此世が私にとつて樂なものかどうか、それはお訊ねになるにも及ばないでせう。」私はその微笑の中にさう云ふ意味を讀んだ。

話は普通の題目にうつつて行つた。ムウザはブウニンのひどく可愛かつて居た猫が一匹あつた事それが彼の死後天井裏に這上つたきり降りて來ず、まるで誰かを呼びびでもするやうにたゞ鳴きつゞけ居る事、近所の人達はひどく氣味悪がつて、屹度ブウニンの魂が猫に乗り移つたのだなどと噂して居ると云ふ事を話した。

「パラモーン・セミーヌイチは何か氣に掛る事があると見えまうね、」私は暫く間をおいて云つた。

「貴方もお氣附きになりましたか？」ムウザは溜息を吐いた。「あの人は、今とても落着いては居られないんです。パラモーン・セミーヌイチが今でも自分の主義を變へずに居ることはお話するまでもないでせう……現在の事態はたゞ益々あの人の信念を固めるばかりなのです。(ムウザの物の云ひ方はモスクワ時代とはまるでちがつて居た。彼女の言葉はひどく書物の臭ひがした。) けど、貴方にお話していかどうか……貴方はどんな風にそれを……」

「何故私に話してはいけないんです？」

「だつて貴方はお役所につとめて居られるんでせう、なら官吏ぢやありませんか？」

「で、それがどうしたんです？」

「だから、貴方は勿論政府に忠實でいらつしやる。」

私は心の中で……ムウザの若さに驚いた。「私など云ふ人間の存在する事さへ知らない政府に對する私の態度なんぞ、此處でくだく説明しようとも思ひませんけれど、私は云つた。「しかし御心配なさる必要はありませんよ。私、貴女の信用を悪用するやうな眞似は致しません。貴女の御良人の信念に對しても……貴女が想像されるよりはずつと同情を持つて居るつもりですよ。」

ムウザは頭を振つた。

「え、それはさうでせうけど、彼女はためらひがちに云ひはじめた。「しかし、本當の事をお話すると、バラモン・セミ・ヌイテの信念は遠からず實行となつてあらはれるかも知れないのです。もう隠しておくことが出来なくなつたのです。見棄て、はおけない仲間の人達が……」

ムウザは舌でも嚙んだやうに突然口をつぐんだ。彼女の最後の言葉は私を驚かした、かすかな恐怖さへも感じさせた。そして恐らく私の顔は自分の感じたことをおもてに現はしたにちがひなかつた——ムウザはそれに気がついた。

前にも云つたやうに、私達のこの邂逅は一八四九年のことだつた。大多數の人達はなほそれがどのやうに物騒がしい、暗澹たる年であつたか、そしてその年にベテルブルグにはどんな事件が起つてあつたか、を記憶して居られるだらう。私自身もバプリンの學動、その態度全體に或る不可解な點をみとめて驚いたのであつた。彼は二度までもはげしい皮肉と憎惡、私自身が不愉快になつたほど底深い嫌惡をまじへて、政府の措置や要路の大官の事を非難した……

「時に、彼は突然私にたづねた。「貴方は御自分の農奴を解放されましたか？」

私はそれがまだである事を自白しなければならなかつた。

「が、お祖母さんはもう亡くなられたんでせう？」

私はこゝでもまた事實を告白しなければならなかつた。

「それ、それ、貴方がた貴族は、」バプリンは吐き出すやうに呟いた。「他人の手で……自分の火を掻き立てる……それが好きなんだ。」

彼の部屋には、一番目立つた所に、ペリンスキーの有名な石版畫がかゝつて居た。卓子の上にはペストウージェフ編纂の古い「北極星」が一冊投げ出されてあつた。

バプリンは料理人に呼ばれて出て行つたまゝいつまでも歸つて來なかつた。ムウザは幾度か不安さうに彼の出て行つた扉口の方をふりかへつた。が、彼女は到頭我慢しきれなくなつて立上つた、そして私にことわつて同じ扉口から出て行つた。十五分ほどたつて彼女は夫と一緒に部屋に復つて來た。二人とも、少くとも私の見た所では、恐しく興奮した顔附をして居た——が、バプリンの顔は突然急に殘忍な、ほとんど兇暴な表情にかはつた……

「結局どう云ふ事にならうと云ふのだ？」彼は血走つた眼で部屋中を眺めまはしながら、不意に、全然彼のものとは思はれない、とぎれ／＼の、哽ぶやうな聲で云ひ出した。「人はみんな世の中が少しでもよくなるか少しでも呼吸が樂になるかとそればかりが頼みて生きて居る——が、事實はまるで反對だ、一切がたゞ益々悪くなつて行くばかりなのだ！我々はもうどたん場まで來てしまつた！若い時分にも、私はあらゆる苦しみを凌いで來た……私は……答で……打たれさへした……」

さうだ！」彼は踵でくるつと廻つて、まるで私に掴みかゝるやうな勢ひでつけくはへた。「私はすでに丁年に達した身で體刑さへ受けたの……さうだ、今、他の不正義については何も云はなくても……しかし、我々にはまた昔にかへるよりほかに本當に道がないのか？ 此頃の若い者に對するやり方はどうだ！ もう此以上の隠忍は不可能だ……到底不可能だ！ さうだ、まつてをれ！」

私は今まで未だバプリンのかうした有様を見た事がなかつた——ムウザはすっかり蒼ざめて居た……バプリンは急に咳入り出して、椅子に身を埋めてしまつた。彼にもムウザにも窮屈な思ひをさせたくなかつたので、私は家に歸らうと決心したが、まだ挨拶をして居る間に、突然隣の部屋につゞく扉が開いて人の頭が一つあらはれた……料理人の頭ではなく、ひどく取亂した、物におびえたやうな若者の顔だつた。

「よくない事が出来た、バプリン、よくない事が出来た！」彼は小聲でせか／＼と云つた、が、私の見知らぬ顔を見ると又すぐに消えてしまつた。

バプリンは若者のあとを追つて駆け出した。私はしつかりとムウザの手を握つて——不吉な豫感につゞまれたまゝ、宿を出た。

「明日またいらして下さい、」彼女は不安げに囁いた。
「屹度参ります、」私は答へた。

翌朝、私がまだ寢床に居る中に給仕がムウザからの手紙を持つて來た。

「親愛なるピートル・ペトロロキッチ！—彼女は書いて居た。『パラモーン・セミョーヌイチは今朝まだ夜の明けぬ中に憲兵の手で捕縛されて——要塞監獄へ送られました。多分監獄だらうと思ひます、何處とも云ひはしませんでしたけど。奴等は私達のあらゆる書類をひつかきかはし、色々なものに封印して持つて行きました。書物や手紙も同様な憂目に遭ひました。街で檢査された人の數は大變なものださうです。私が今どんな氣持で居るかをお察し下さい。ニカーンドル・ヴァーイーリイチが今日まで生きて居なかつたのは大變な仕合せでした。あの人は丁度いゝ時になくなりました、私、どうしていいかお教へ下さい。私は自分の事を怖れはしません——飢死するやうな事もないでせう——しかしパラモーン・セミョーヌイチの事を考へると一刻もちつとしては居られません——もし私達のやうな境遇にあるものを訪ねるのをお恐れになりませんでしたら、どうぞいらして下さい。』」

貴方の忠實なる

ムウザ・バプリナ

半時間の後、私はムウザの部屋を訪ねた。私を見ると彼女は黙つてその手をさしのべた。一言も口はきかなかつたけれど、感謝の色は顔中にあふれわたつた。彼女は昨日と同じ着物を着て居た。終夜床につかなかつた——一睡もしなかつた容子があらゆるところに見られた。彼女の眼は眞赤だつた——が、それは不眠の所爲で、涙のためではなかつた。彼女は泣かなかつた。泣くどころではなかつた。彼女は積極的に動かうとして居た、自分の上に落ちかゝつて來た不幸と闘はうとして居

た。昔のエネルギー、大膽なムウザが再び甦つたのであつた。彼女は怒りに息詰りながらもその怒りをどこに洩らさうともしなかつた。どうしてバプリンを助けたらいいの、彼の刑を軽くするには誰に訴へたらいいの、彼女がそれ以外のことは何一つ考へなかつた。彼女は今すぐにも駈けつけたかつた……歎願に……請願に……が、何處に行けばいいの、誰に請願したらいいの、そして何を要求すればいいの、それが彼女の私から聞きたいと思ふことだつた、私に相談したいと思ふことだつた。

私は先づ彼女に……忍耐する事をすゝめた。最初の中はたゞ氣長く待つて居て、出来るかぎり事情をしらべるよりほかない。事件がやつと始まつた——今やつと火がついたばかりなのに、あわてて何か決定的な企てをするのは、たゞ愚かな、無思慮なことだ。たとへ私がつつと高き位置にある人間だつたとしても、今此事で成功をのぞむのは全然不可能だ……まして小役人の私に何が出来るか？ 彼女自身にした所で、やはり今すぐにつけるやうな有力な知合は一人もないではないか……

これを全部彼女にのみこませるのは一通りの事ではなかつた……が、彼女も遂には私の議論に納得した。私があらゆる企畫の無効な事を説くのも決して利己的な感情から出たのではないと云ふことも了解した。

「しかし、ムウザ・バーヴロウナ、」私は彼女がやつと椅子に腰をおろしたのを見て云つた。「それまで彼女は今すぐにバプリンを救ひに行かうとでもするもの、やうに立ちつゞけに立つて居たので

あつた。」「パラモーン・セミーヌイチはどうして、あのお年齢で、かう云ふ事件にまきこまれたのです？ 私、實は、この事件に加はつたのは、たゞ昨日の晩貴女方に警告に來たやうな、あゝ云ふ若い人達だけだと思つて居たんです……」

「あの若い人達は——我々の友達なんです！」ムウザは叫んだ。彼女の眼は急に光を帯びてまた昔のやうにせはしく動きだした。はげしい、抑へがたいある力が魂の底から湧き上つて來たのであつた……私はふといつかタールホフの云つた「新しいタイプ」と云ふ言葉を思ひ出した。「事が政治上の信念に關する場合には、年齢などは問題ぢやありません！」ムウザは政治上の信念と云ふ二語に特に力を入れて云つた。そのあらゆる悲しみの中にあつても、なほ、この新しい、全く以前とはちがつた光につゝまれた自分——共和主義者の妻たるにふさはしい、教養ある、成熟した婦人としての自分を見せる事が決して不愉快ではないのであつた。「老人の中にだつて青年より若い人も居ます、」彼女はつゞけて云つた。「喜んで自分を犠牲にする人も居ます……けど、問題はそこぢやないのです。」

「貴女は少し誇張していらつしやるやうだ、ムウザ・バーヴロウナ、」私は云つた。「パラモーン・セミーヌイチの性格から考へて、私は以前からあの人であらゆる……誠意のある運動に同情を持つて居られる事を信じて居ました。けど、一方、私はまたあの人をいつも極めて理性に富んだ人だと考へて居ました……あの人には、露西亞と云ふ國では如何なる陰謀も決して成功しないと云ふ事が、それが最も無意味なものであると云ふ事がよく解つて居たんぢやないでせうか？ あの人

地位あの人の職業で……」

「そりや勿論、」ムウザは敵意を含んだ聲でさへぎつた。「あの人は平民ですわ。そして露西亞に於ては陰謀にくみすることは只貴族達にだけ許される事だ、たとへば十二月十四日の事のごとく……貴方のおつしやるのはさう云ふ意味なんてせう？」

「それならば何の苦情を云ふ事があるんです？」私は危なく口に出すところだつた……が、やつと自分をおさへた。「貴方は十二月十四日の事件の結果が他のさうした企てに力をつけるやうなものだつたとお思ひになりますか？」私は聲高に云つた。

ムウザは眉をひそめた。「貴方とそんな事を議論してもはじまりません、」私は彼女の俯向いた顔の中にさう云ふ意味を讀んだ。

「バラモーン・セミョーヌイチの嫌疑はそんなに重大なんですか？」私は暫く間をおいてから訊ねて見た。ムウザは何とも答へなかつた……不意に天井裏からひもじさうな、氣の立つた猫の鳴聲が聞えて来た。

ムウザはハツと身顫ひした。「あゝ、ニカインドル・ヴァザールイチがあれを見ないでよござんした！」彼女は殆んど絶望的な呻きを洩した。「あの人はまだ夜も明けな中にある人の恩人が、私達の恩人が、恐らく世界中で一番立派な、一番誠實なあの人がどんなに亂暴に引立てられて行つたかを見なかつたのです……さう、あの人はそれを見ませんでした、奴等があの年齢になるあの立派な人をどんな風にあつたか、どんな風に貴様呼ばはりしたか、……どんな風に脅し追つたか

……どんな言葉で脅迫したか……たゞあの人が平民だつてばかりに！ あの若い士官も矢張り程度良心のない、人間の心のない奴だつたのです、私も以前一人そんな奴に會つた事がある……」

ムウザは聲がつかなくなつた。彼女は全身まるで木葉のやうに顫へて居た。

今まで抑へつけて居た怒りが到頭爆發したのであつた。そして魂全體の擾亂に底から掻き立てられて昔の記憶までが表面に浮び上つて来たのであつた……が、その刹那、私ははつきりと彼女の中の「新しいタイプ」が依然としてその熱情的な、衝動的な性質を失はずに居るのを見てとつた……たゞムウザの心を動かす衝動が青春時代のそれと同じくだけであつた。私をはじめ彼女を訪ねたときに諦め、忍従とつたもの、また實際さうであつたもの——あの静かな、光のない眼、冷やかな聲、無關心な、無難作な態度——それらはたゞ過去の、二度とは歸らぬ事柄に關してのみの事なのであつた……

今や現在が力強く彼女の心を捕へた。

私はムウザの心をやはらげようとつとめた、私達の談話をもつと實際的な問題に移さうとつとめた。とにかく猶豫しては居られぬいくつかの仕事があつた。我々は先づバブリンが何處に居るのかを確實に知る必要があつた。それから彼の爲にも、ムウザの爲にも糊口の道を立てなければならなかつた。それは實際一通りの仕事ではなかつた。我々は金よりも先づ職を見附けなければならなかつた、そして、それは誰も知つて居るとほり、前者に比べては遙かに複雑な問題なのであつた……私は色々と思ひで一杯になつてムウザの家を出た。

私は間もなくバプリンが要塞監獄に居ることを知った。

審問が始まった……それはおそろしく長びいた。私は毎週幾度かムウザと會つた。彼女もまた幾度か夫と會見を許された。けれど此痛ましい事件が全部決定したとき、私は丁度ベテルブルクに居なかつた。全く思ひがけない事件が私を南シベリアまで追ひやつたのであつた。私は旅先でバプリンが審問の結果無罪になつたことを知つた。彼の罪と云ふのはたゞ若い人達が彼のことを嫌疑を受けさうにもない人物だと見こんで、度々彼のところで集會を催はし、彼もまたそれにのぞんだと云ふだけなのであつた。しかし、彼は行政命令によつて西伯利亞の西部に追放されることになつた。ムウザも彼にしたがつた。

「……バラモーン・セミョーヌイチはそれを喜びませんでした。彼は書いてよこした。「あの人の意見によると、人には事業のためでなく——單に他人のために自己を犠牲にする権利はないと云ふのです。けれど私はそれが決して犠牲だの何だの云ふ問題ではないことを申しました。モスクワであの人にあの人の妻になると云ふ事を申しましたとき、私はひとり心の中で考へました——永久に離れてはならないのだ」と。ですから私達は最後の日まで離れてはならないのです……」

4

——一八六一年——

また十二年たつた……恐らく露西亞に住むかぎりの人はみな一八四九年から六一年までの年月がどんな風に過ぎたかを知つて居り、また永久に忘れないであらう。私一個の生活の中にもまた色々の変化があつた、が、今それについて述べる必要もない。新しい事件、新しい苦勞が代る／＼起つて來た……バプリン夫婦のことも先づ背景におしやられ、つゞいてすつかり心から薄れてしまつた。それでも私はやはりムウザとの文通はつゞけて居た——たゞ非常に長い間をおいてはあつたけれど。時には一年以上も全く彼等の消息を知らずにすぎた事もあつた。一八五五年がすぎると間もなく私は彼が露西亞に歸る許可を得たこと、しかし彼は運命が彼をおしやり、彼もまた其處に巢を營み、安息と活動との地を見出した、その西伯利亞の小都會を去るのを肯じなかつたと云ふ事をきいた……

そして一八六一年の三月末、私はムウザから次のやうな手紙を受取つたのであつた。

「随分久しいこと御無沙汰致しました、親愛なるビョートル・ペトロヴィッチ。私は貴方がまだ無事でおいでかどうか、無事でおいでとしてもまだ私達のことを憶えていらつしやるかどうか、それも存じません。けれど、そんなことはどうでもようございませぬ、私は今日は是非とも貴方に手紙を書かずには居られないのです。私達のところでは一切が昔のまま、進んで居ります。私もバラモーン・セミョーヌイチもすつと私達の學校のことに拘つて参りました、それらも少しづつ進歩して來て居ります。その上バラモーン・セミョーヌイチは讀書や、通信や、また舊信者、僧侶、流論の波蘭士人などを對手に例の議論で寧日ない有様でした。あの人の健康は順調でした……私のも同様で

御座います。ところが昨日の事で御座います、あの二月十九日の布告が私達の手許に達したので御座います！ 私達は長い事を待ちのぞんで居りました、ペテルブルクでどんなことが行はれたかその噂はもうずつと前から聞えて居つたのです……けれど、私達にとつてそれが一體どんなことであつたか、私にはとても書くことが出来ません！ 貴方は私の所天をよく御承知です。あの人は不幸に遭つても少しも變らず、却つて益々強く、益々精力的にさへなつて参りました。(ムウザ自身は以前に比べてずつと精力的な書き方をして居たことも否むことは出来ない。) あの人の意志の力は全く鐵のやうなものでした、それでもあれを見た時はやはり自分を抑へて居ることが出来なかつたのです！ あの人の手は讀みながら顫へました、それからあの人は三度私を抱いて、三度接吻して、何事か云はうとしました——けど、何も云へませんでした！ そして到頭駭り泣き出しました、私はひどく驚きました、するとあの人は突然大聲を擧げて叫びました。「ウラア！ ウラア！ 神よ、皇帝を護りたまへ！」 さうなのです、ビョートル・ペトロヴィッチ、あの人は實際そのとほり申したのです！ それからあの人は云ひつゞけました。(神は今や僕を解放ちたまへり……) それから「これが第一歩だ、あとのものがこれに續かなければならん。」そして着のみ着のままで、帽子も被らずに此の偉大なる知らせを友人達にふれる爲に駆け出しました。ひどい寒さで、大吹雪さへ催はしかけて居りました。私はひきとめました、が、あの人は耳にも入れませんでした。歸つて来た時、あの人は身體中雪をかぶつて、髪も、顔も、髯も——あの人は今胸までとどく長い鬚髯があるのです——それから頬の涙までずつかり凍りついて居りました！ けれどあの人は元氣で、

上機嫌で、私にツイムリヤン酒の瓶をぬかせ、一緒に連れて歸つた友人達と一緒に、皇帝、露西亞及び自由なる全露西亞國民の健康の爲に乾盃致しました、そしてあの人は盃を把つて、眼を地に俯せて申しました。「ニカインドル、ニカインドル、君、聞えるか？ 露西亞にはもう一人の奴隷も居ないのだぞ！ 墓の下で喜んでくれ、我が舊友よ！」それからあの人はなほ「自分の期待が充された」ことについて論じました。もう絶対に後戻りする惧れはないこと、これは——一種の擔保または約束のやうなものであることも論じました……私、一々憶えては居りません、けれど、私はまだあの人のあんなに幸福さうな容子は見たことがありません。それで私は貴方に手紙を差し上げるやうに決心致しました。私達が遠い西伯利亞の曠野でどんなに喜び、どんなに幸福で居るかをお察し下すつて、貴方もどうか私達と一緒に喜んで下さるやうに……」

此手紙を私は三月の末に受け取つた。が、五月の始めにも一つ極く短い手紙がムウザからとどいた。それは彼女の夫パラモン・セミョーヌイチ・バプリンが、あの布告の着いたその日に風邪をひいて、それが肺炎になり、四月の十二日に到頭六十七歳で亡くなつたことを知らせてよこしたものであつた。彼女はそれにつけ加へて、自分がやはり所天の屍を埋めた土地にとどまつて、彼ののこした事業をつゞけて行くつもりであることを書いて居た——それがパラモン・セミョーヌイチの最後の意志であり——そして自分にとつてはそれ以外の律法はないから、と云ふのであつた。その後私は一度もムウザの消息を聞いたことがない。

解説

「プウニンとバプリン」は一八七四年に書かれた。此最も多く自傳的要素を含む物語は、それ自身としての興味以外に、おそらくトゥルゲエニエフの或る作品、特に「父と子」「處女地」等を研究するものにとつて最も重大な暗示を含むものではないかと思はれる。

一八六一年、「父と子」の一般社會にひきおこした凄じい反響は後數年の間再び同じやうな主題に作者を近づけることをしなかつた。最も繊細な、鋭敏な時代精神の把握者と呼ばれ、「ルーヂン」「貴族の巢」「その前夜」と連續するいくつかの物語において事實その評語に裏書して來たトゥルゲエニエフも六十年代初頭の空氣を描いた此作においてつひにその力の不足を暴露せざるをえなかつたのであつた。我々は「バザロフはニヒリストではなくてスケプティストである、そこに『父と子』の失敗の最も重大な原因がある」と云ふアイヘンワリドの言葉に輕々しく賛成する事は出來ない。又トゥルゲエニエフ自身を「何もかもみとめざる最悪のニヒリスト」として、そこに一切の原因を求めようとするゲルツェンの態度をそのままに受入れる事も出來ない。トゥルゲエニエフ自身も云ふとほり、事實バザロフが「自らをニヒリストと呼ぶとき、我々はそのまゝレヴァリユーシ・ニストの意味にとる」ことが出来るのである。そしてトゥルゲエニエフはその革命家の主人公を

「心から愛し、そして尊敬した。」しかし、バザロフは常に自らの作者の一步前を歩いた。ルケエニエフはつひに自らの主人公に追隨する事が出來なかつた。おそらく「父と子」の一篇を成功せしめなかつたすべての原因は此一點にあると思はれる。バザロフが未だその生涯の上り坂にあるとき、作者のトゥルゲエニエフは先づ思想家として破滅してしまつたのである。結局バザロフはその主人公としての興味の頂點において忽然として不慮の死にたふれる。そして「父と子」一篇は、そのあらゆる美にもかゝらず、否、むしろその美のゆゑに、ニヒリスト・バザロフの物語としてははなはだふさはしからぬ結末を以てあわたくしをばつてしまふのである。

「父と子」に對する攻撃は、しかし、別な視點から加へられた。そしてトゥルゲエニエフは再び同様な問題に手をふれなかつた。ひきつゞく年月の間に書かれた「幻影」「もう十分だ」「薄倅の女」等の幾篇かは憂鬱家を以て聞えた此作者にあつてもなほ稀なほど深い哀愁をおびたものとしてあらはれた。

そして十五年の後——悲しい「煙」をへて——再び大作「處女地」が書かれた。

ルーヂンからラウレツキー、インサアロフをへてバザロフにまで發展したトゥルゲエニエフの主人公は「處女地」に到つて截然として二つの性格に分裂した——ニエジダーノフとサローミンと。それはトゥルゲエニエフのすべての主人公の總決算でもあつた。そしてトゥルゲエニエフは此處でも再び痛ましい破滅をくりかへさなければならなかつた。自ら信ずる事の出來ないニエジダーノフは當然自ら殺すよりほかなかつた。そして彼の死の上に自らの道をすゝんで行つたサローミン

は、作者自身の彼に對するあらゆる讚美にもかゝらず、一篇の主人公としてはむしろ甚だ影の薄
い、力弱い、そして生硬な一個の土偶にすぎなかつた。

ブランドスとクロボトキンとが、此作の不成功の原因をより多く祖國の社會状態に對する作者の
眞の知識の缺乏に歸しようとするとき、それは未だ全幅の眞理をのべたものではないのである。作
者に缺けて居たものは眞の知識ではなくて、むしろその祖國に對する眞の信仰であつた。問題はむ
しろ作者の生得の人生觀にあるのである。トゥルゲエニエフはバザロフの型をも十分に理解し、サ
ローミンの型にもまた盲目ではなかつた。けれど「煙」の作者は遂に彼等を信ずる事が出来なかつ
た。「バザロフがルーヂンだ?!」これはトゥルゲエニエフ自身の抗議である。けれどバザロフの
中に屢々ルーヂンの弱さを感じるのは決して我々の罪ではないのである。

○

「ブウニンとバブリン」は一八七四年、「父と子」に十三年おくれ、「處女地」に二年先立つて書か
れた。おそらく此小説の主人公バブリンはトゥルゲエニエフが作家として最後まで生かした唯一
の革命的タイプであつたらうと思はれる。彼はバザロフのやうにはなく、しい外貌をもつたニヒ
リスト、レヴォリョーションニストではない、又サローミンのやうに明瞭な革命的意識をもつて
「民衆の中へ」行かうとした七十年代の人物でもない、彼はむしろ不思議に弱々しい、惘鬱な外貌
——屢々かの「餘計者」の面影をすら持つ消極的な一革命主義者でしかない。そしておそらくその
點こそ作者が最後まで此人物に追隨しえた唯一の原因だつたらうと考へられる。トゥルゲエニエフ

が屢々自らの作品のあらゆる美と簡素とを故意に棄て去つて、やゝもすればより複雑な、困難な主
題に赴かんとした事實はアイヘンワリドのすでに指摘した所である。此傾向が彼に「父と子」を書
かせ、また「處女地」を書かせた。結句彼はそのいづれにおいても作家としての力の不足を暴露し
て破滅するよりほかはなかつた。おそらく「ブウニンとバブリン」は「父と子」において一旦地に
倒れた作者が、同様な主題において再び立上らうとした悲しい努力のあとであつたらうと思はれ
る。作者はもはやバザロフの光輝を以てその主人公を飾らうとしなかつた。彼は我々がすでに「ヤ
ーコフ・パスインコフ」において一度出遭つた最もトゥルゲエニエフ的な人物としてあらはれ、時代
も又大改革以前の惘鬱な時代、作者の筆に最も親しかつたかの關黒時代にとられた、作者はすなは
ち前作より一步しりぞいてその陣をはつたのであつた。そしてトゥルゲエニエフは成功した。彼は
何等の思想的破綻を示す事もなく、又作家としての力の不足を暴露する事もなかつた。けれど、「父
と子」の十三年以後における、バザロフ以前の革命主義者バブリンの物語の成功は、思想家トゥル
ゲエニエフにとつて何と云ふ悲しい成功であつたらう。

トゥルゲエニエフは作家として到底バザロフに追隨する事が出来ず、又サローミンに十分の生命
をあたへる事も出来なかつた。彼はたゞその二つの作品の間には生まれた惘鬱な「ブウニンとバブ
リン」においてのみつゝまじやかな成功を示した。おそらく此兩個の事實の間の關係交渉のあとこ
そ社會小説家としてのトゥルゲエニエフ、又彼が生きた時代の露國社會を研究するものにとつて又
ない鍵をあたへるものだと思はれる。バブリンは作者自身が社會思想家として自らたどりえた最後

15472

●リプバミンニウブ

の境地にはかならなかつた。そこに四十年代作家としてのトゥルゲエニエフの宿命がある。

昭和四年二月十日 第一刷發行
昭和二十三年九月十二日 第九刷發行

プウニンとバプリン
定價參拾圓



譯者 小沼 達

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地 岩波 雄二郎

印刷者 東京都板橋區志村町五番地 楠末 治

發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋二ノ三

岩波書店
會員番號A一〇九〇〇四號

凸版印刷・永井製本

24年6月6日 509

閱覽濟

讀書子に寄す

—岩波文庫發刊に際して—

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。當ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に散らし立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かさりしか。更に分賣を許さず讀者を驚愕して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の實務の意重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を實現すべしと断然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亘つて文學社會科學自然科學各種の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき真に古典的價值ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に必要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便して價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益々強めしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は毅力を傾倒しあらゆる困難を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうらはしき共同を期待する。

昭和二年七月

終

